

茨城県行方郡麻生町

大麻貝塚発掘調査報告書

1990・2

大麻貝塚発掘調査会



正 誤 表

ページ	行	字	誤	正
3	下から 6 行目	後から 5 字目	多くの史跡 <u>の</u> 存在する。	多くの史跡 <u>が</u> 存在する。
4	下から 2 行目	前から 25 字目よ り 6 字分	<u>第 10 号土坑に</u>	<u>削除</u>
8	図版説明挿入		第 5 図 2 号住居址実測図	第 5 図 2 号住居址出土遺 物実測図
13	図 版		4 号土坑 ← → 5 号土坑 入れかえ	

序 文

茨城県の東南に位置し、霞ヶ浦と北浦の湖に囲まれた総面積 97.43 km²、人口 18,100 余人 “水辺の里” 麻生町。

この地が人間生活を営むうえから極めて良好な自然環境のもとで古くから文化が栄えました。このことは、先人の遺した数多くの遺跡が物語っております。

麻生町は、これらの埋蔵文化財の保護と、後世に継承する重要性を踏まえ、その対応に努力しているところでありますが、近年における生活環境の変化、環境整備に係る開発や造成等が増大しており、遺跡の現状維持保存は、非常に厳しい状況となっています。

この度、麻生町大字麻生 1741 番地の 1 を中心として土砂採取のための取付道路設置工事が計画され、文化財保護の立場から遺跡を保存することを前提として文化財保護審議会等で種々協議を重ねましたが、現形保存が困難であるとの理由から止むなく発掘調査を実施して記録保存をすることになりました。

本調査を実施するにあたり、茨城県教育委員会、鹿行教育事務所の諸先生のご指導をもとに、鹿行文化研究所 汀 安衛氏を調査主任として「大麻貝塚発掘調査会」を発足させ、約 2 ヶ月間の発掘調査を無事完了することができました。これひとえに調査主任の 汀 先生をはじめ関係各位のご指導ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

さらに文化財保護に対する深いご理解のもと、発掘調査に係る一切の経費をご負担いただきました有限会社幸新取材代表取締役 金山貢大氏に対しまして深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

おわりに、本書が行政のみにとどまらず、町民各位、学校など幅広く活用され、文化財の愛護精神と郷土愛を育てる貴重な文化資料となりますことを期待するものであります。

平成 2 年 2 月 15 日

大麻貝塚発掘調査会

会長 根 本 宗 一

(麻生町教育長)

凡　例

1. 本書は、茨城県行方郡麻生町大字麻生字大宮境外1727の2 他に所在する大麻貝塚の一部が、道路法24条による町道計画に係わる部分の調査報告書である。
2. 調査は、鹿行文化研究所の 汀 安衛が担当した。
3. 調査は、平成元年6月9日から7月9日までの11日間行った。
4. 調査時の写真は教育委員会 貝塚俊洋氏にお願いした。
5. 整理は、原喜代子、佐々木文男、潮来高校生見嘉子、野口陽子、大崎みどりが水洗い、注記、版組、土層、遺物観察を行い報文トレースは 汀 安衛が行い総括した。
6. 調査にあたり町当局を初め鹿行事務所、県文化課、地主幸新取材(有)など多くの方々の協力を受けた。

大麻貝塚発掘調査会組織一覧

役職名	氏名	備考
会長	根本宗一	麻生町教育委員会 教育長
副会長	平輪一郎	麻生町文化財保護審議会会長
理事	藤崎謙一	麻生町文化財保護審議会委員
"	植田敏雄	麻生町文化財保護審議会専門調査員
"	汀安衛	鹿行文化研究所 調査主任
"	金山貢大	有限会社幸新取材 代表取締役
"	貝塚俊洋	麻生町教育委員会 事務局長
幹事	小林秀美	麻生町教育委員会 社会教育係長
"	高野裕	麻生町教育委員会 社会教育主事
監事	永作栄吉	有限会社幸新取材
"	糸賀洋一	麻生町出納室長
指導機関	茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所	

調査協力者

大野雅美	原喜代子	阿部好正
箕輪喜美	佐々木文男	小堤たよ
羽生久男	男庭留吉	男庭常次郎
鬼沢ヤス	岡里嘉一	山本熊藏
小松崎昇	矢幡さわ	椎木かづ
小松崎すみ	塙育造	

目 次

序 文		第11号土坑	17
I 調査に至る経過	1	第12号土坑	17
II 史的環境	2	第13号土坑	19
III 遺構と遺物	4	第14号土坑	19
1. 住居跡		第15号土坑	19
第1号住居跡	4	第16号土坑	19
第2号住居跡	5	第18号土坑	21
第3号住居跡	9	第19号土坑	22
2. 土 坑		第20号土坑	23
第1号土坑	10	第21号土坑	23
第2号土坑	11	第23号土坑	23
第4号土坑	12	3. 溝、道路	
第5号土坑	12	第1号溝	25
第6号土坑	14	第1号道路状遺構	25
第7号土坑	15	4. 土坑・表採遺物	
第8号土坑	15	第1号道路	29
第9号土坑	15	M 総 括	31
第10号土坑	17		

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	2	第12図	10. 11. 12号土坑実測図	18
第2図	遺構位置図	4	第13図	13. 14号土坑実測図	20
第3図	1号住居跡実測図	5	第14図	15. 16号土坑実測図	21
第4図	2号住居跡実測図	7	第15図	18. 19号土坑実測図	22
第5図	2号住居跡出土遺物 拓影、実測図	8	第16図	20. 21号土坑実測図	24
第6図	3号住居跡実測図	9	第17図	23号土坑実測図	25
第7図	1号土坑実測図	10	第18図	1号溝実測図	26
第8図	2号土坑実測図	11	第19図	1号道路状遺構実測図	27
第9図	4. 5号土坑実測図	13	第20図	土坑、表採出土遺物 拓影図、実測図	29
第10図	6. 7号土坑実測図	14	第21図	明治年間の字切図	30
第11図	8. 9号土坑実測図	16			

図 版 目 次

P L 1	調査前の風景高校側から〔上〕 調査前の風景東北側から〔下〕		P L 9	8. 9号土坑完掘〔上〕 10号土坑遺物出土状態〔下〕
P L 2	上空から見た大麻貝塚〔上〕 上空から見た大麻貝塚と陣屋跡〔下〕		P L 10	11号土坑完掘〔上〕 12号土坑土層〔下〕
P L 3	調査終了後西側から〔上〕 調査終了後東側から〔下〕		P L 11	12号土坑粘土塊〔上〕 12. 18号土坑完掘〔下〕
P L 4	1号住居跡完掘〔上〕 2号住居跡遺物出土状態〔下〕		P L 12	15. 16号土坑完掘〔上〕 21号土坑土層〔下〕
P L 5	2号住、玉出土状態〔上〕 2号住完掘北側から〔下〕		P L 13	23号土坑土層〔上〕 18. 19号土坑完掘〔下〕
P L 6	2号住完掘と県道〔左端、上〕 1号土坑完掘〔下〕		P L 14	1号道路状遺構中央部〔上〕 調査風景〔下〕
P L 7	2号土坑完掘〔上〕 4号土坑完掘〔右、出土遺物、左、下〕		P L 15	調査風景〔上〕 2号住居跡出土遺物〔下〕
P L 8	5号土坑完掘〔上〕 6. 7号土坑完掘〔下〕		P L 16	土坑、表面採集出土遺物

I 調査に至る経過

大麻貝塚は、大麻神社を取り囲む台地の北西部に最大の貝の散布地を有し、保存状況も極めて良好な周知の遺跡である。

今回の調査は、神社の南西約50mに位置し県道水戸鉢田佐原線に隣接した約600m²が対象となり、以下の経緯により調査が実施された。

平成元年4月26日 (有)幸新取材より町教育委員会に対し砂採取工事計画についての概略説明があり、その際の取付道路に係る遺跡の確認依頼を受けた。

5月11日 遺跡台帳と照合確認後、県文化財保護指導員 内野健造氏に現地の確認踏査を依頼した結果、取付道路区域に遺物と貝の散布(住居跡?)が確認された。

これにより(有)幸新取材に対し協議を申入れ、確認踏査の結果を報告するとともに、遺跡の重要性を考慮し現状保存に対する理解を求め、開発計画の変更について協議を重ねた。

しかし、あらゆる角度から検討した結果、計画変更は不可能で遺跡の現状保存が困難であり発掘調査を実施してほしい旨の検討内容を受けた。

5月26日 町文化財保護審議会を開催し、これまでの経緯を説明するとともに、開発に伴う遺跡の取扱いについての協議を実施した。

審議会での最終答申では、遺跡のもつ意義や重要性を踏まえ、調査区域を最小限におさえ慎重な調査により記録保存を図ることで合意を得る。

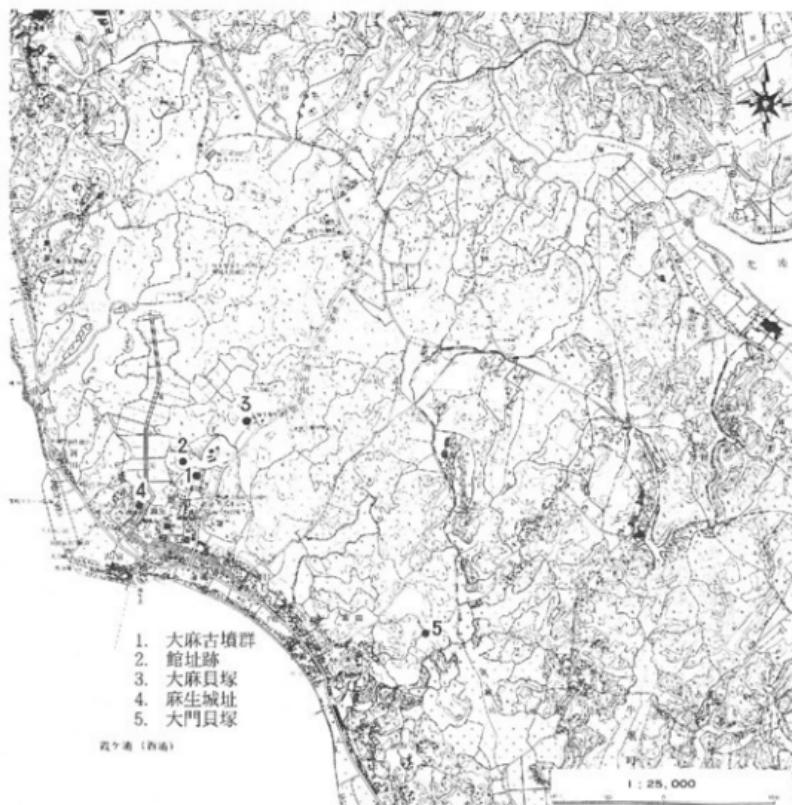
さらに、県文化課及び鹿行教育事務所の諸先生方の御指導御助言を受け、文化財保護の立場から遺跡保存を前提とする方策を考慮したが、発掘調査を実施し記録保存を図ることとなり、(有)幸新取材に対し調査に対する協力を依頼し、調査方法、経費等について事前協議を行ない、関係書類の提出に至った。

6月17日 麻生町教育委員会教育長 根本宗一を会長とする大麻貝塚発掘調査会が発足し、さらに鹿行文化財研究所 江口安衛氏を調査主任とする発掘調査団が結成され、平成元年6月17日から平成元年7月22日の期間で調査が実施された。

II 史的環境

麻生町は茨城県の東南部、東に北浦、西に霞ヶ浦に挟まれた半島状の行方郡の中央部に位置し北側は北浦村、玉造町、南側は潮来町、牛堀町にそれぞれ境を接し面積的には最大の町域を有し人口18,500人はほどで江戸時代では本域唯一の城下町として繁栄を見た。明治時代から昭和30年代までは鹿島、行方郡の中心として各官庁の出先機関も多く設置されていたが現在は鹿島郡や各町村に移りつつ有りやや停滞気味の感を呈している。

地勢的には標高30m～34m程の台地が南北に伸びこの台地を北浦、霞ヶ浦から入りこむ中小の



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

河川によって樹枝状に支谷が形成されかなり複雑な地形を呈し河川周辺、北浦、霞ヶ浦に面する地域は広大な水田を形成、台地上は煙草をはじめ各種の野菜が、水田・湖水面では、ハウスによるイチゴの栽培、いけすによる鯉の養殖なども盛んである。

古代においては恵まれた自然環境にあって縄文時代から多くの遺跡が残されている。今回調査を行った大麻貝塚も縄文時代中期から後期にかけての貝塚でかなりの貝層が認められ、土器もかなり多量に散布を示しているが調査区は遺跡の中心からかなりはずれている為に遺構の主体は古墳時代以降の土坑が大半を占めた。

縄文時代の遺跡は明確な踏査が行われていないため定では無く貝塚の数、遺跡はかなり増加すると推定出来る。

弥生時代の遺跡は現在確認されていないが遺物はかなり認められており遺跡として認定できると思われる地域も存在する。

古墳時代の遺跡も支谷、及び沖積地に面する台地縁辺にかなりの数が認められ古墳も前方後円墳6基、円墳10基からなる根小屋古墳群をはじめかなりの古墳が存在しており中でも一部損壊を受けた根小屋古墳群は中小古墳の造営から終息に至る経緯を残すものとして貴重な古墳群として捉えられるものと理解される。

奈良時代には行方郡の郡家が行方の国神神社周辺に置かれたと謂われているが現在まで確定はされていない。今後の調査研究がまたれる。又多くの論文がある。〔麻生の文化1~20号〕

平安時代末大掾清幹の二男忠幹が行方に入り其の子宗幹が源平の合戦に参加し屋島にて討ち死にした、その軍功に因り行方郡を治めることと成了。その子孫が玉造、島崎、麻生に屋形を構え後に戦国時代の小豪族へと発展を見たが島崎氏に依って麻生氏は滅ぼされ、一族の中でも島崎氏は一円支配を目指しつつ有ったと考えられ在地勢力の伸張を理解するうえで重要な問題であり、又行方氏が小高氏と名乗り替えたとすればこれまた重要な問題である。行方氏の祖と成る一族が単純に祖の地を替える事で名を替えることは今日でも滅多聞かれ得ない事でこれら一族の繁栄を物語る屋形、城跡が行方、小高、小屋、島並、根小屋、船子などに残されその他多くの出城等が存在している。

そのほか江戸時代初期に築かれた「新宮城」陣屋が存在行方、鹿島唯一のもので後に現麻生の新庄氏陣屋へと移行する貴重な遺跡と理解出来る。以上概略を述べたが多くの史跡の存在する。

この度調査を行った地区は前述のように町道に係わる長さ約85m、幅約7m、面積約600m²の〔L〕字状を呈する。この中の約100m²程は第2図に示す様に約20°の傾斜を有し南側から入り込む支谷に県道を介し落ち込む、西側は、町役場側から入りこむ支谷末端が調査区の西側10mまではいり北側は、約2m程農道を介して比を増しかなりの縄文時代の遺構が観察出来る。

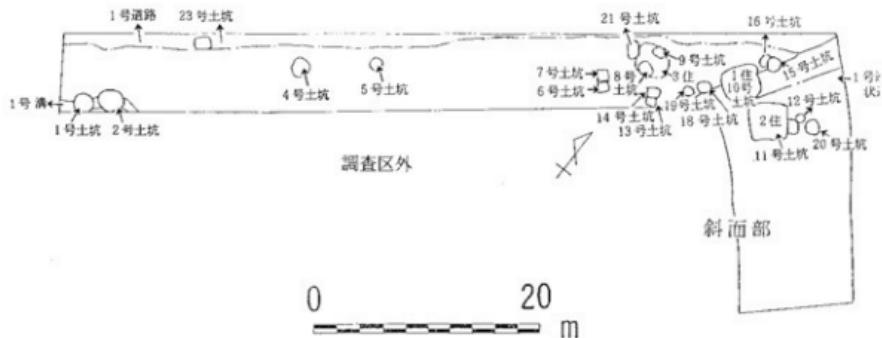
そのほか調査区の北東側100mには大麻神社が位置し、沿革誌によれば大同元年の創建と言われ

社宝に石器が2点と馬場、神田などの地名などが残され麻は今日の麻生とかなり密接な関係が理解され馬場も今回の調査によって其の一部と考えられる部分が確認された。

その他、大麻古墳群、城館跡等が500mの範囲に2カ所存在し古代から今日まで恵まれた歴史的環境に有る。

III 遺構と遺物

調査によって2軒の住居跡と住居跡と推定されるもの1軒、土坑19基、溝と考えられるもの1条、道路と考えられるもの1条、道路1条が検出された。以下住居跡、土坑、溝、道路の順に述べていきたい。なお時代については総括の中で述べ調査の番号をそのまま造構番号とした。土坑は17、22号は調査の結果木根の抜痕と考えられ事實残根が存在していた為欠番とした。



第2図 遺構位置図

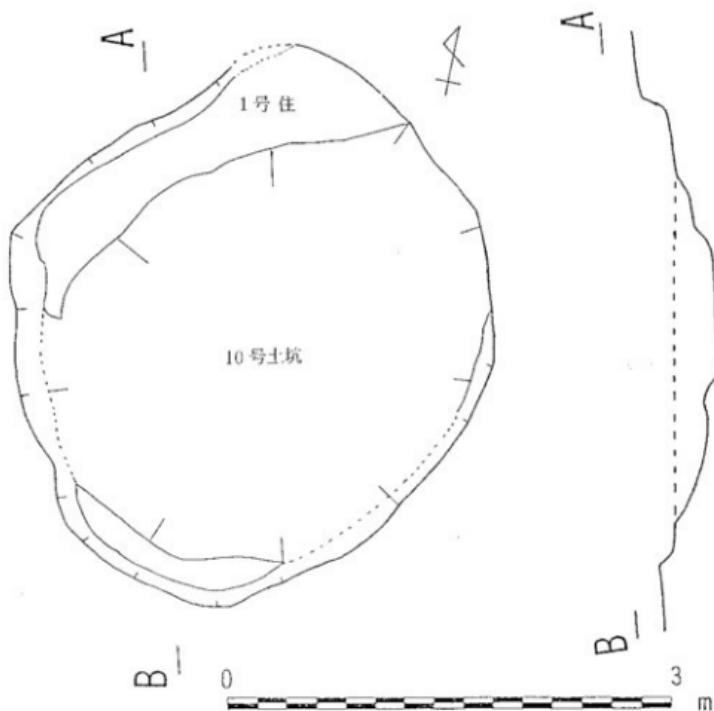
1. 住居跡

第1号住居跡（第3図）

本跡は、調査区の東側に位置し大半を第10号土坑によって掘りこまれ第1号道路状遺構とした部分の下部に存在していたが遺存状態は悪く、掘り込み深さは10cm～15cmと浅く遺存面から推定すれば精円径状のプランを呈するものと思われる。推定径3.5m程の規模をもつと考えられ遺存面の床面は良く踏み固められていた。柱穴、炉跡、周溝は検出されなかった。

遺物は、床面から縄文後期の破片が1点出土したのみでこの遺物1点で時期を決定することは無理がある。

床面状に伸びる道路状遺構を掘り込んで第10号土坑が第10号土坑に掘りこまれこの遺構の遺物にかなりの縄文式土器が認められた。



第3図 1号住居跡実測図

第2号住居跡（第4・5図）

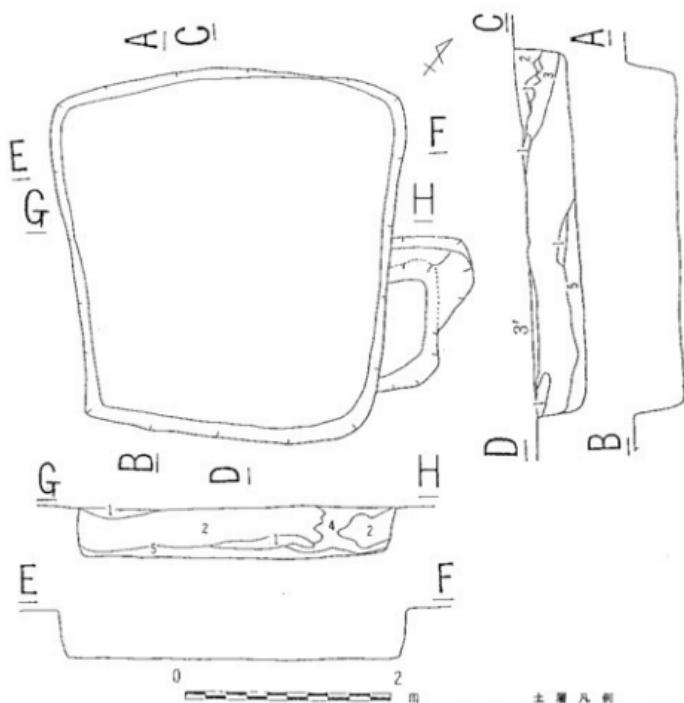
本跡は、1号住居跡の南側50cmに位置し台地が僅かに南東側に傾斜気味の地点に占地し主軸をN-58°Wに置き北壁側3.7m、南壁側2.7m、東壁側3.4m、西壁側3.1mを測り北壁側が1m程長い変形な方形プランを呈している。

東側には入口状の掘り込みが認められたが覆土からは、明確な相違が見られ住居跡がこの土坑を切り込み営まれている事が推定される。

壁面は40cm～50cmの鋭角的な掘り込みを有し、覆土とは明確な分離が見られた。壁面は、かなり良好な状態で検出された。床面はほぼ平行に移行僅かに中央部が低いが締まりは良く主柱穴、周溝、竈、炉跡等は確認出来ず存在しない。

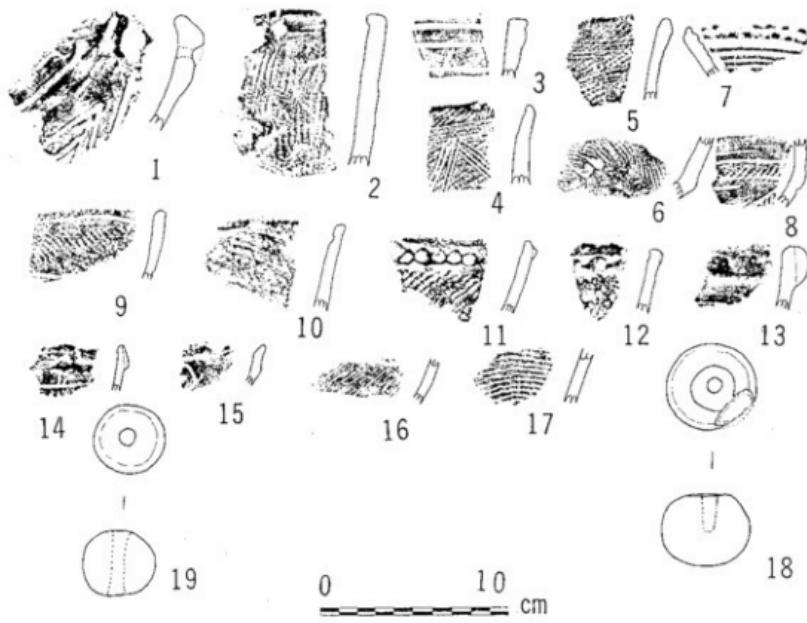
覆土は5層に分類された。1層は明褐色ロームブロック、粒、粒子をやや多量に含み粘性無く締まりはやや有り散在的に認められた層である。2層は褐色で大半を占めるもので確認面から一部は床面にかけて認められる層で本跡の埋積状態を示す、ロームブロック 1cm～4cmを小量ローム粒をやや多く含み1層よりやや明るい、粘性は無く締まりは弱い。3層は鈍い黒褐色を呈し中央部から北壁に向かって斜めに移行して認められた。層は土坑状を呈し入るが層序からはその可能性は無い。砂質性の粘土状粒子を含むもので黒褐色粒子を多量に含む。僅かにロームブロックを極小量含む（4mm～1cm）。粘性、締まりは強い。3'層としたものは若干明るいだけで確認面の部分にあたる。4層は暗褐色で確認面から認められた。一部は床面、壁面に存在一部は2層の下位に位置する、砂（暗褐色）を多量に含むもので粘性、締まりは弱い。5層は床面から5cm～10cm程の厚さをもってほぼ水平に埋積を示していた層で東側の一部と北側の大半では存在しなかった。床面の8割を占めるもので明褐色を呈しローム粒子、粒を多量に含む粘性、締まりはややある。これらの層序は人為的な埋積と理解出来る。

遺物は、総数200片程認められた。検出された遺物は大部分縄文土器で有ったが床面から土錐、土師器、杯等が認められた。第5図1は波状口縁を呈する深鉢で磨消部に沈線で菱形区画を施し半截竹管に依る刺突を持つ、頂部下に円形の孔を持つ、2はLRの地文、口唇部平滑、内側に張りだす。3は磨消部に沈線を施し口縁部肥厚、口唇部平滑、4.5は半截竹管による2条1組（4本単位）の横位、5は菱状構成を胴部に持つ、2.3.4.5は内側に弱いナゾリを持つ、6は底部か節の小さいLRを施す、7は内面に沈線をもち外面は磨消、浅鉢、8は横位の沈線間にLRの繩を施す、9は口唇部に刻み目下位に沈線を巡らす、10は内側に幅の広い1条の沈線、11.12は口縁の隆帯に連続的に押圧を加え地文はLRで粗い。13は口縁部肥厚する。14.15は器肉の薄いもので14は隆帯に繩文、15は玉抱き対弧文、16.17は弥生式土器胴部。18は砂岩製の製品。19は土製丸玉、ほぼ球形。他に肩部に顯著な稜をもつ杯が床面から出土している。



土層凡例					
番号	色調	含 有 物	性 質	特 徴	説 明
1	灰褐色	ロームブロック、粒、粒子や多量	な	し	やや古り
2	褐色	ロームブロック 1~4cm少量、 ローム粒や多量	な	し	弱い
3	にじい 黒褐色	砂質粘土状、粒子多量、 ロームブロック (3mm~1cm) 種少量 (3は3より少明顯)	強 い	強 い	
4	暗褐色	砂 (暗褐色) やや多量	弱 い	弱 い	
5	明褐色	ローム粒、ローム粒子多量	やや古り	やや古り	

第4図 2号住居址実測図



第5図 2号住居跡実測図

第3号住居跡（第6図）

本跡は、調査の最後に褐色土層の掘れる部分を掘り込み一部床面と推定される部分が存在した（点線部分）為住居跡とした。範囲として捉えた部分はローム面が若干立上がり氣味に認められた部分で破線部分は攪乱部、内部には8. 9号上坑、木の根痕などが認められた耕作の跡も一部見られ明確では無い、掘り込みは浅く10cm前後。柱穴、周溝、炉、竈等は検出されない。

プランは不明、遺存部分からは方形状か？…………。

遺物は土師器、縄文式土器が小量検出されたが、時期を決定する決め手は無い。



第6図 3号住居址実測図

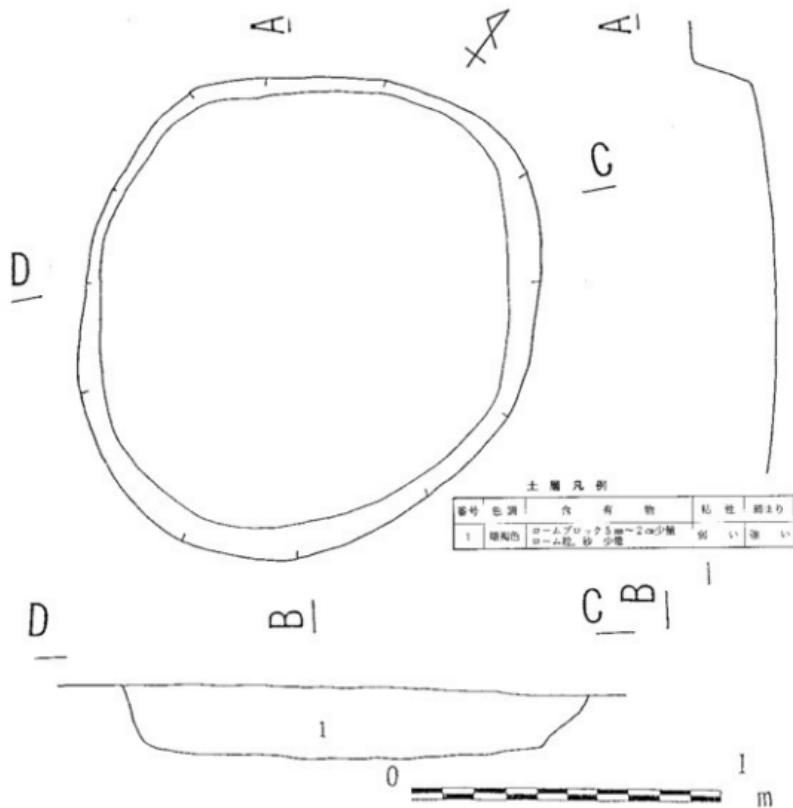
2. 土 坑

第1号土坑（第7図）

本跡は調査区の最も西側に位置して検出され遺構はほぼ平坦な面に占地し1号溝を掘り込んでいる。長径 16.5 cm、短径 14.5 cm の円形状を呈し、掘込み深さは 18 cm ~ 22 cm で中央部がやや低くなりながら移行、底部の締まり、状態は良好であった。

覆土は1層で暗褐色を呈しロームブロック（5 mm ~ 3 cm）小量、粒子、砂を含み粘性は弱いが締まりは強い。

遺物は北側に寄った位置から14片検出され総数20片でいずれも器形の窺えるものは無い。



第7図 1号土坑実測図

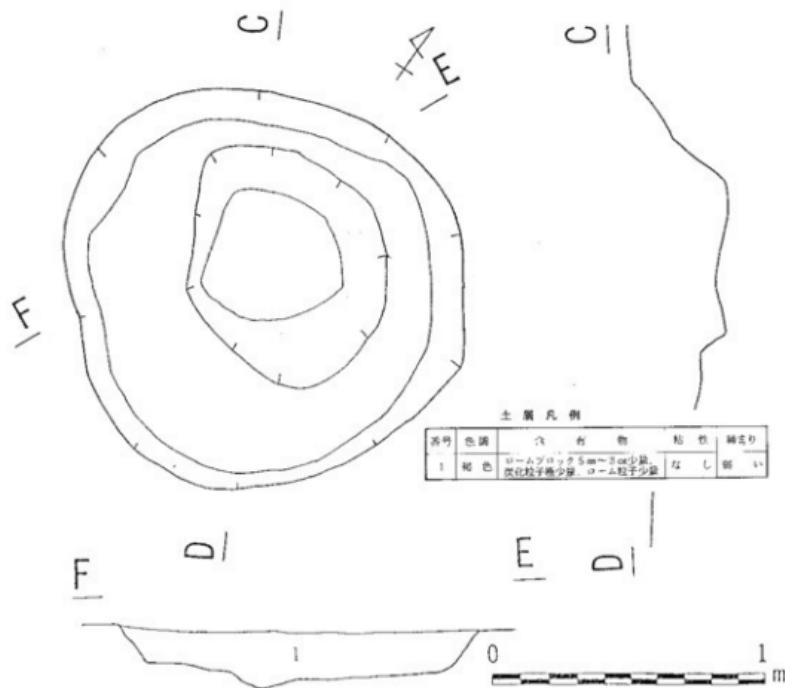
第2号土坑（第8図）

本跡は、1号土坑の東側20cmに隣接して位置し1号溝を掘込んで検出された。径1.45m×1.5mのはば円形状の掘り込み、深さ12cm前後で一段、中央部では20cmとやや低い。底部、壁面の締まりは良い。

覆土は、1層で褐色5mm～3cmのロームブロック、粒子を含み、炭化粒子を極少量含む。粘性は無く締まりは弱い。

遺物は皆無に近く時期を決定出来るものは無い。いずれも土器器の細片が5点ほどみられた。

第3号土坑は調査を行ったが途中で木根抜痕と判明したため中止し欠番とした。松の木のヒダ部分が確認され切断を受けていた。



第8図 2号土坑実測図

第4号土坑（第9図）

本跡は、2号土坑とした東側に位置し緩く北に傾斜を示して検出された。旧道との関係と理解される。径1.1m程の円形を呈し深さ70cmやや鋭角な掘り込み、底部は水平に移行、壁面、底部共に良好な状態で検出された。

覆土は、2層に分類され3層は1層と同じ、1層は1cm～3cmのロームブロックを多量に含み粒子を小量含む褐色、2層は灰、ロームブロック3mm～1cmをやや多く含む何れも粘性は無く、締まりは弱い。

遺物は縄文式土器の細片2、土師器細片1何れも胴部の出土で時期を決定するものは無かった。

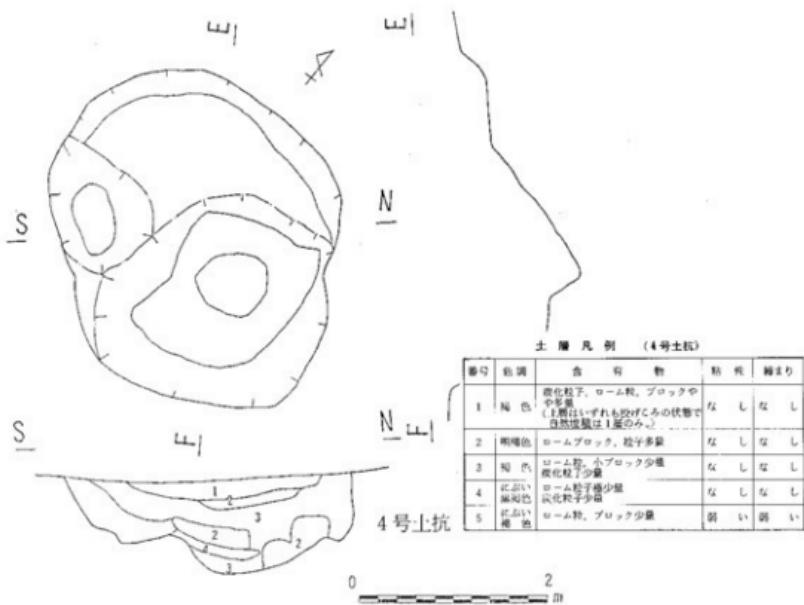
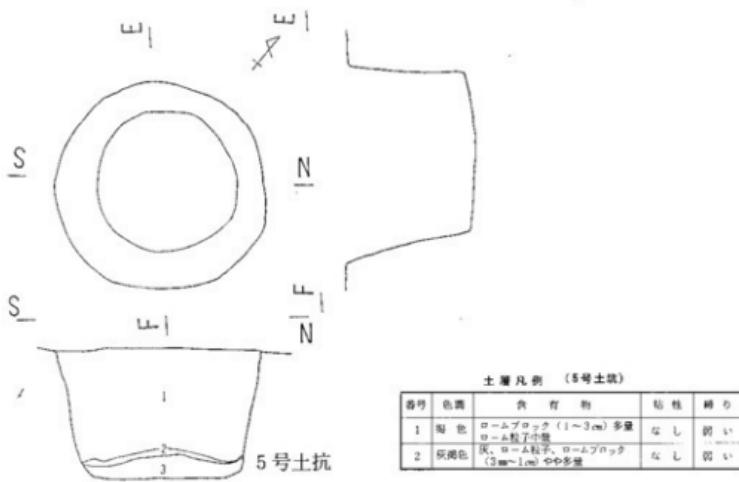
第5号土坑（第9図）

本跡は、4号土坑とした東側に位置しやや北側に傾斜を示す面に検出され旧道の関係と思われる。径1.5m～1.8m程の不整形状、深さ50cm、底部は二段に移行、壁面、底部ともかなり凹凸な状態を残していた。木根痕状の可能性も考えられる。

覆土は5層に分類されたやや不規則な埋積、1層は褐色で炭化粒子をやや多く含む。2層は明褐色ロームブロック、粒子を多量に含む。3層は1層に近い、4層は鈍い黒褐色中央部に波状に見られた層で有った。5層はロームブロック、粒子を小量含む。何れも粘性は5層を除き無く締まりも無い。5層は粘性、締まりは弱い。

遺物は総数6片検出された。敲石、西瓜状の絵が描いて有る陶器片が底部から出土している。そのほかアカニシが2個体出土、状態はやや良い。

陶器片からはかなり新しい年代が推定される。江戸時代？……。



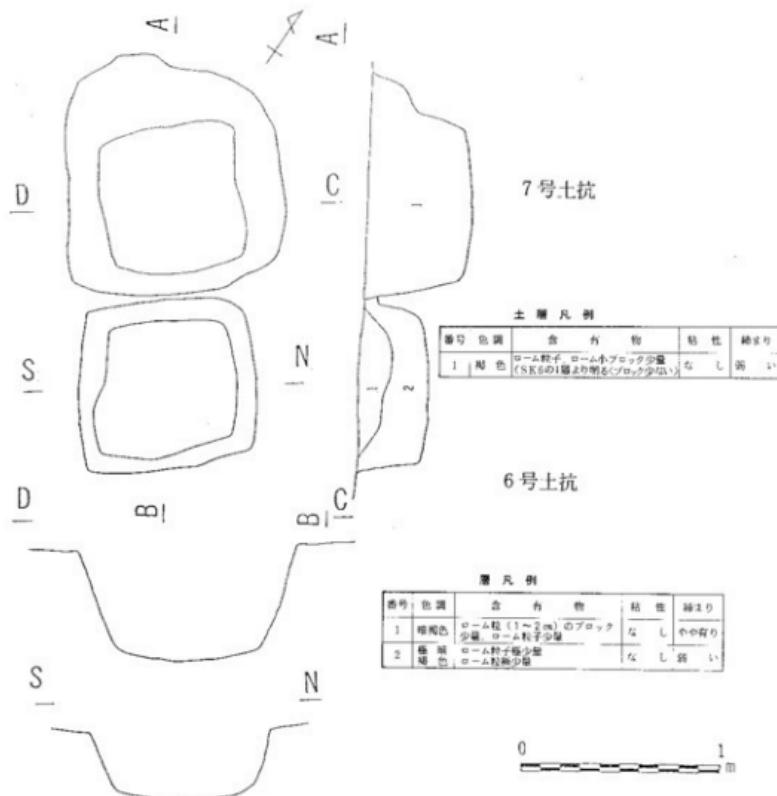
第9図 4・5号土抗実測図

第6号土坑（第10図）

本跡は調査区の中央部や東側に位置し、ほぼ平坦な面において検出され、7号土坑との切り合い関係にある。一辺85cm×90cmの隅部のやや丸みをもつ方形プランを呈している。深さは35cmで、緩く北側に向かって上がり気味、ゆるい「U」字状、底部、壁面ともに良好な状態。

覆土は2層に分類され、1層は暗褐色、2層は極暗褐色、1層はロームブロック、粒、粒子がやや2層より多い。締まりはややあり、粘性は無い。

遺物は縄文後期の土器が1片、河原石1点のみであった。墓塚か？。



第10図 6・7号土坑実測図

第7号土坑（第10図）

本跡は、6号土坑の一部を切り込み営まれていた。一辺 $1.1\text{m} \times 1.15\text{m}$ のほぼ方形プランを呈する。深さは約 50cm を測る。6号土坑に比べやや深く、立ち上りはやや鈍角、底部、壁面は良好。覆土は1層で褐色ローム小ブロック、粒子を含む。粘性は無く、締まりは弱い。6号土坑の1層より明るくブロックは少ない。

遺物は総数6片、縄文土器が4片、雲母片岩1、土師器底部1片回転糸切り痕を持つ、時期を決定するものは無いが回転糸切り以降の年代が与えられる。中世？

第8号土坑（第11図）

本跡は、7号土坑の北東側に位置し3号住居跡とした中に掘込まれて確認されたもので長径 $1.75\text{m} \times$ 短径 1.34m の梢円形状形態、掘り込みは 7cm 前後と浅く底部の締まりはあまり良くない。ほぼ水平に移行。覆土は暗褐色ローム粒子を小量含み粘性は弱い。締まりはややある。

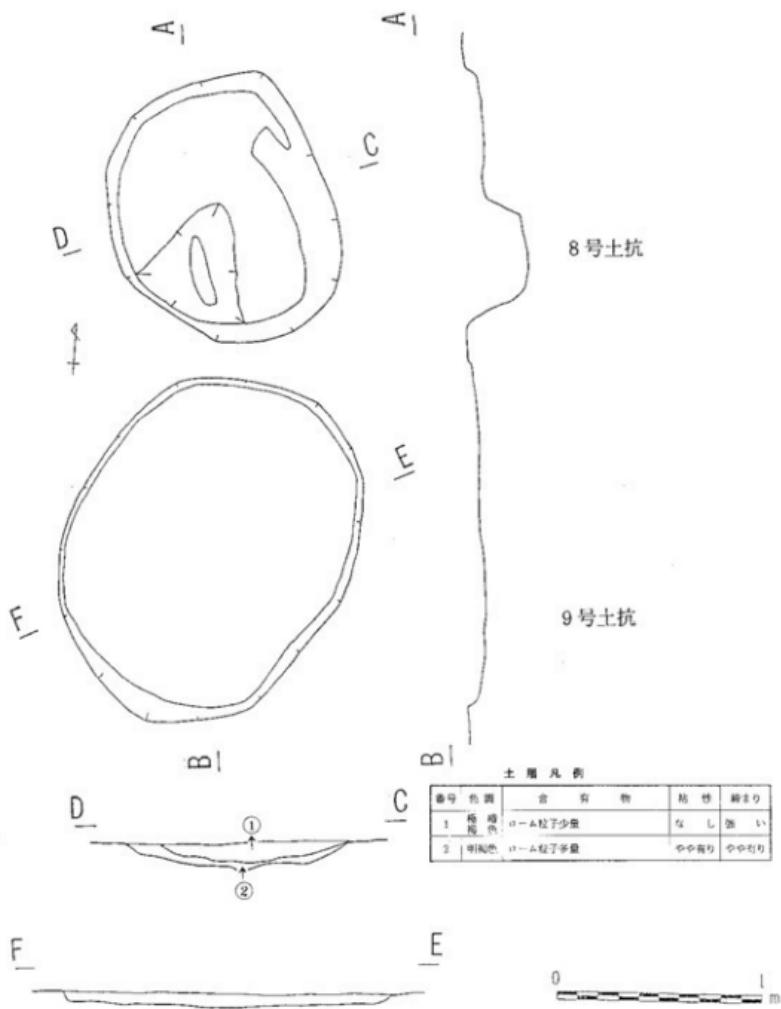
遺物は総数4点検出され3片は縄文土器1点は河原石であった。何れも摩耗がひどく本跡との関係は断定できない。

第9号土坑（第11図）

本跡は、8号土坑の北側に位置し長径 $1.3\text{m} \times$ 短径 1.1m の長円形状を呈し底部は $10\text{cm} \sim 30\text{cm}$ の二段の掘り込みを持ちやや締まりをもつ、壁面は開いて立ち上がる。

覆土は2層に分類され1層は極暗褐色ローム粒子、砂を含む、2層は明褐色ローム粒子を多量に含む。1層は粘性は無いが締まりは強い。2層は粘性、締まりはやや有る。

遺物は皆無で有った。砂等の混入から新しい時期が推定される。



第 11 図 8・9 号土坑実測図

第10号土坑（第12図）

本跡は、調査区のL字状に折れる部分に位置し検出されたもので1号住居跡の大部分を掘り込み検出された。長径3.2m×短径3.1mのやや梢円気味の形状を呈し深さは65cmほどを測る。鍋底状の底部を呈し壁面は緩く立ちあがる。西側に焼土、炭化物等がやや浮いて検出された。底部は小さな凹凸面をもつ。

覆土は4層に分類された。1～3.5層は明褐色いずれもロームブロック、粒子、粒の混入の差であり粘性は、締まりは弱く4層のみ締まりをもつ、層序からは緩やかなレンズ状を呈しており自然埋積、一部人為的な投込みが推定される。

遺物は総数51点検出され縄文式土器が21片、石皿の一部と思われるもの1、アカニシ2状態は良い。土師器11片、メノウ1、ビー玉1、その他河原石、石核状の物等であり底部からは縄文、上部からはビー玉が出土している。遺物からは新しい時代が推定される。明治？

第11号土坑（第12図）

本跡は2号住居跡の上部から検出されたもので台地は東側えゆるく傾斜を示す面に占地し長軸1.1m×0.65mの長方形を呈し深さ13cmと浅く底部は締まりは弱い。僅かな差であるが二段になり壁面の立ち上りは開く。

覆土は2層に分類された。1層は暗褐色ローム粒、粒子を極小量含む。2層は褐色ロームブロック5mm～1cm、粒、粒子を小量含む粘性は無く。締まりは弱い。

遺物は総数120点検出され縄文土器が61片、土師器が41片、須恵器が1片、雲母片岩3その他河原石11、時期不明の土師器と思われるものなどがみられたが何れも細片で有った。縄文土器は後期の加曾利B式前後、土師器は鬼高式1式前後。

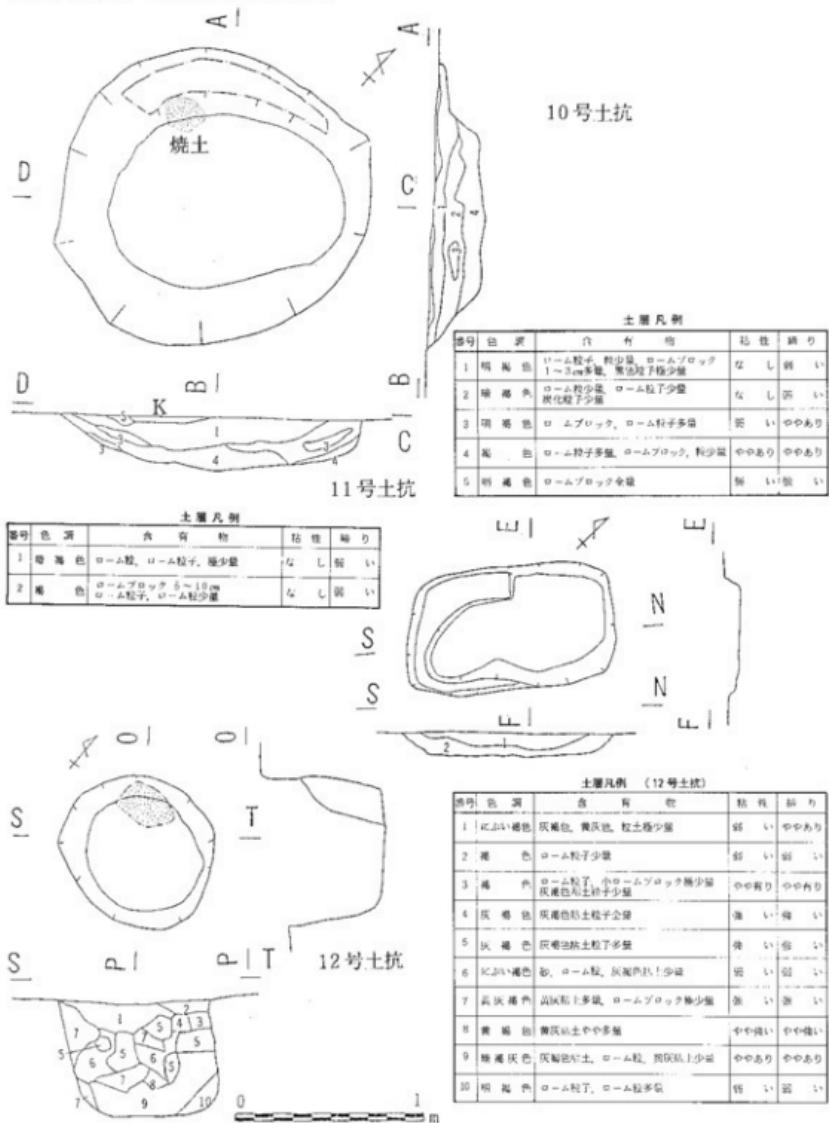
第12号土坑（第12図）

本跡は、2号住居跡の東側のほぼ平坦な面に検出された。長径85cm×短径75cmの梢円形状を呈し深さは60cm、底部は平坦に移行締まりはやや有る。壁面は鋭角的な立ち上がり、状態は良い。

覆土は10層に分類した。調査した土坑では最も複雑な層位を示していた。主体をなすものは灰褐色、黄灰褐色の粘土を含む層で3～9層までがこれらを含み粘性、締まりは強い、平面的には北側に底部から粘土が認められるに過ぎなかった。何れもブロック状の人為的な埋積を示す土層である。

遺物は総数91点認められた。何れも覆土中からの出上で底部からは1点も検出されなかった。内訳は縄文土器が36片、土師器カメ12点、杯1、弥生式土器胴部1点他は全て1～5cm程の河原石であった。遺物からは時期を特定出来る資料は無いが底部に回転糸きり杯底が見られる事か

らかなり新しい時期の所産と考える。



第12図 10・11・12号土坑実測図

第13号土坑（第13図）

本跡は、3号住居跡の南側から検出された長方形状プランの土坑で長軸 1.35m × 1.1m のやや菱形気味、底部は不整形、深さは 50cm ほぼ水平に近く移行綺まりは良い。壁面は鋭角的、状態は良好。

覆土は1層でローム粒子、ブロック 1cm ~ 3cm を小量含み粘性は無く綺まりは弱い。

遺物は河原石で大きさ 3cm 程の物が1点であった。時期を特定出来るものは無い。墓塚か？。

第14号土坑（第13図）

本跡は、13号土坑の極一部を掘り込み営まれ時間的には新しく成る。長軸 1.2m × 短軸 1.05m の長方形プランを呈し深さは 75cm を測り底部はほぼ平坦に移行、綺まりは良い。壁面は開き気味に立ち上がり状態は良い。

覆土は1層で褐色、ローム粒子を含みブロックを極小量含み粘性は無く、綺まりは弱い。

遺物は土師器のカメと思われる胴部1片、陶器1片、河原石4点で有った。時期を決定出来る遺物は無い。墓塚か？。

第15号土坑（第14図）

本跡は、1号住居跡の北側に位置し16号土坑を切り込み営まれていた。径 1.55m のほぼ円形を呈し深さは 1.04m と深く底部、壁面共覆土は明確に分離され共に良好な状態を呈していた。

覆土は1層でやや暗褐色ローム粒、ブロックを多く含む、粘性は無く綺まりも無い。

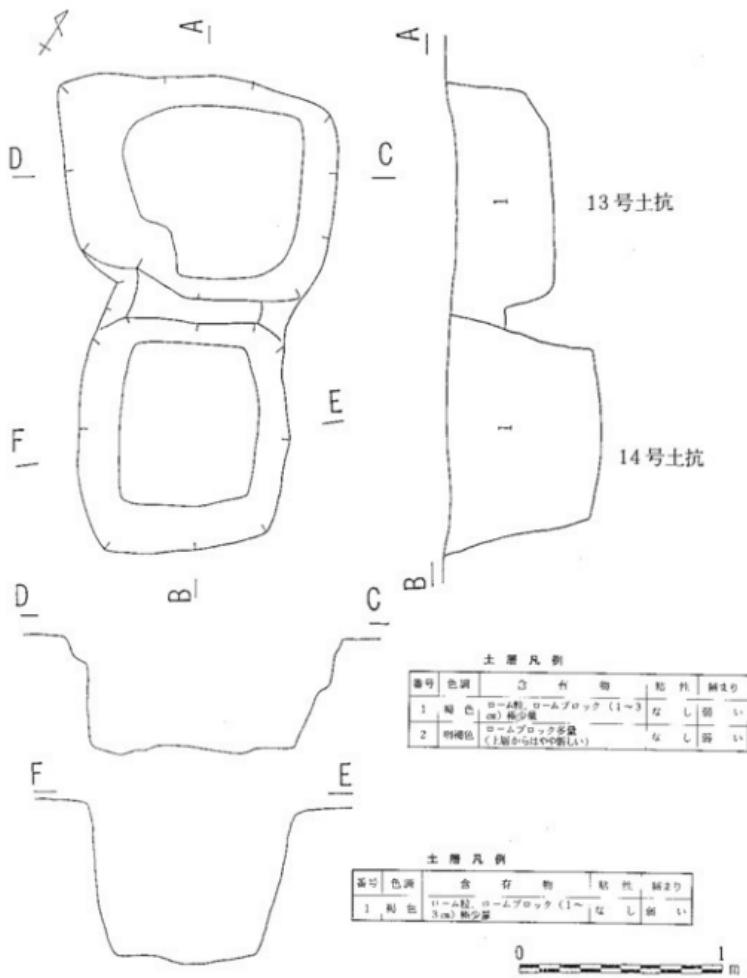
遺物は、底部から石が1点、土師器カメが1点そのほか縄文土器が2点、河原石7点が認められたが時期を決定する遺物は無かった。

第16号土坑（第14図）

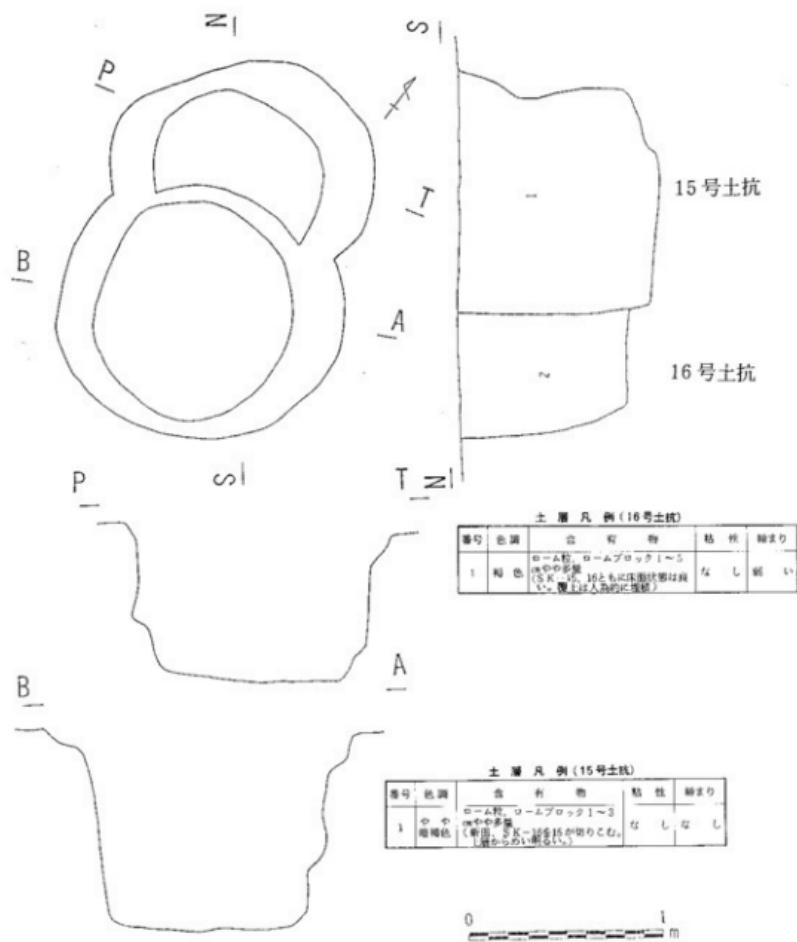
本跡は、15号土坑に大半を切り込まれ遺存部は約6割前後と推定される。遺存部から推定すれば径 1.35m 前後の円形を呈すると思われ、深さは 87cm と15号土坑よりやや浅く底部はほぼ水平に移行、壁面は鋭角的に立ち上がる。底部、壁面共良好である。

覆土は1層で明確に15号土坑に切り込まれ分離され、褐色と明るいロームブロック 1 ~ 5cm、粒子を多く含む。粘性は無く、綺まりは弱い。

遺物は、底部から河原石が1点出土したに過ぎず時期を決定するものは無かった。時期は15号土坑より古い。



第13図 13・14号土坑実測図



第14図 15・16号土坑実測図

第18号土坑（第15図）

本跡は、1号住居跡の西側ほぼ平坦な面に位置し1号道路状遺構とした面を一部切り込み検出された。長径 1.7 m × 短径 1.46 m の楕円形状を呈している。19号土坑との間は木の根痕に因って攪乱を受けて同一状を呈している。深さは 22 cm と浅くゆるく二段になる。立ち上がりはゆ

るく開く。

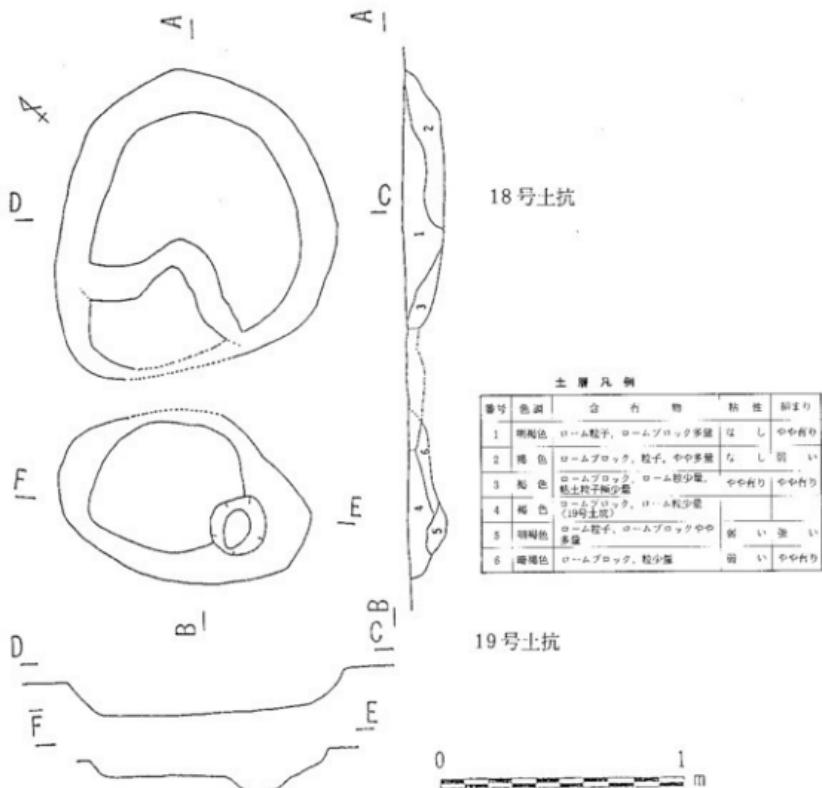
覆土は、3層に分けられ、明褐色、褐色層でロームブロック、粒子の混入の差で3層だけ僅かに粘土粒子を含む。粘性は3層を除き無く、縮まりはややある。

遺物は皆無。時期を決定出来る資料は無かった。道路状造構よりは新しいと理解される。

第19号土坑（第15図）

本跡、18号土坑の西側に位置し検出された。長径 1.35 m × 短径 0.95 m の長円形状を呈して底部は南側にピット状の落ち込みが見られ深さは 27 cm で浅い。底部は縮まりは弱く小さな凹凸が見られ状態は良くない。

覆土は、3層に分けられいずれも明褐色、褐色、暗褐色で粘性は弱く、縮まりは4.5層は強



第15図 18・19号土坑実測図

い。ロームブロック、粒子の混入の差で4.5層から遺物はまとまって出土している。

遺物は縄文式土器55片、土師器カメ6片、杯3片、時期不明の物10片等で時期は出土した土器から古墳時代後期、鬼高一期前半と考えられる。

第20号土坑（第16図）

本跡は、2号住居跡の東側に検出されたもので東に傾斜を示す肩部に占地する。長径1.45m×短径1.2mの不整形形状を呈する。底部は二段になり深い部分は50cm、浅い部分は7cmを測る。いずれもやや凹凸気味を呈し縄まりは悪い。立ち上がりは外反する。

覆土は、3層に分けられ大部分は1層の暗褐色が占め粘性は無く縄まりも弱い。2層はロームブロックを多量に含み明褐色、3層はロームブロック、粒子を含む。粘性、縄まりはやや有る。

遺物は、総数12点検出され内訳は縄文土器8片、土師器杯1肩部に稜を持つ、石斧1刃部欠損、その他は河原石で有った。時期は出土遺物から古墳時代後半鬼高一期が推定される。

第21号土坑（第16図）

本跡は、3号住居跡の西側に位置し旧道の一部を掘りこみ検出されたもので時間的に新しいことが当所から判明していた。径1.24m程のやや不整形の円形状を呈する。掘り込みは深さ50cmと26cmの二段になり底部の縄まりはやや良いが凹凸を持つ。立ち上がりは東側は鋭角的、西側では開く。

覆土は、4層に分類されたが1.2.3層はロームブロック、粒子の混入の差、4層は暗褐色で砂を小量含む、この層は旧道上面に検出された物と同一である。

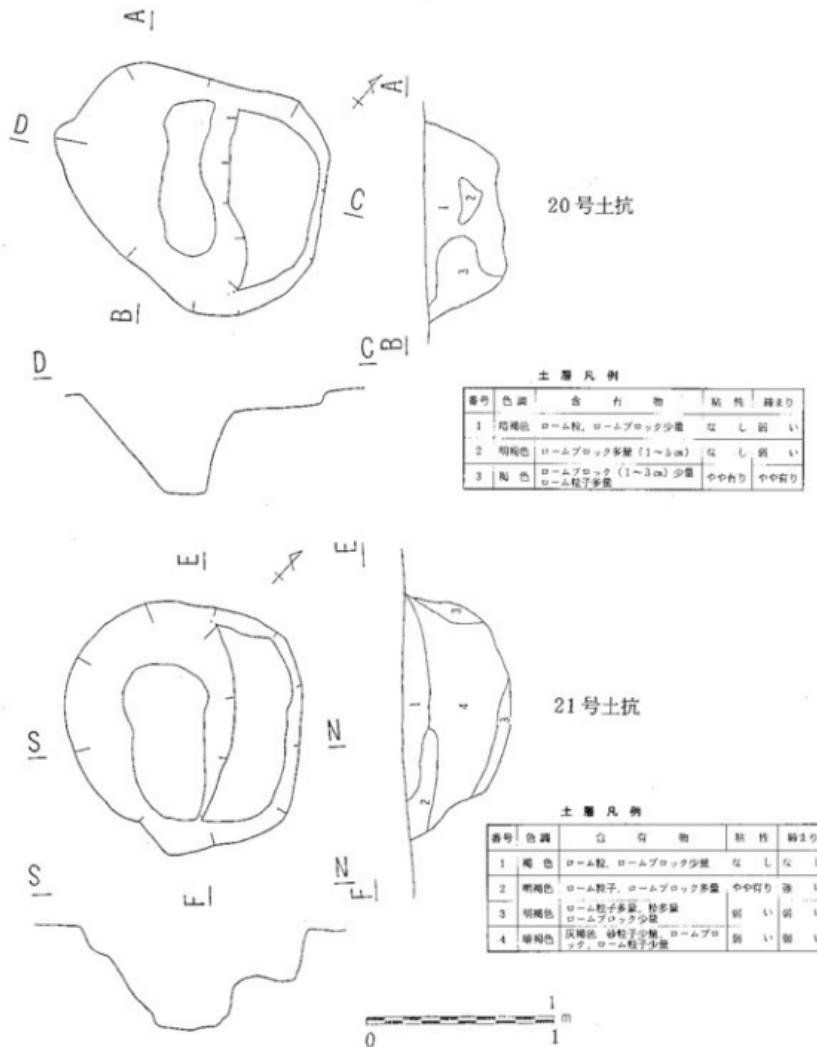
遺物は、総数6点検出された。内訳は縄文土器1片、土師器カメ2片、河原石4、石斧状のもの1であった。時期を決定する資料は無い。

第22号土坑（第17図）

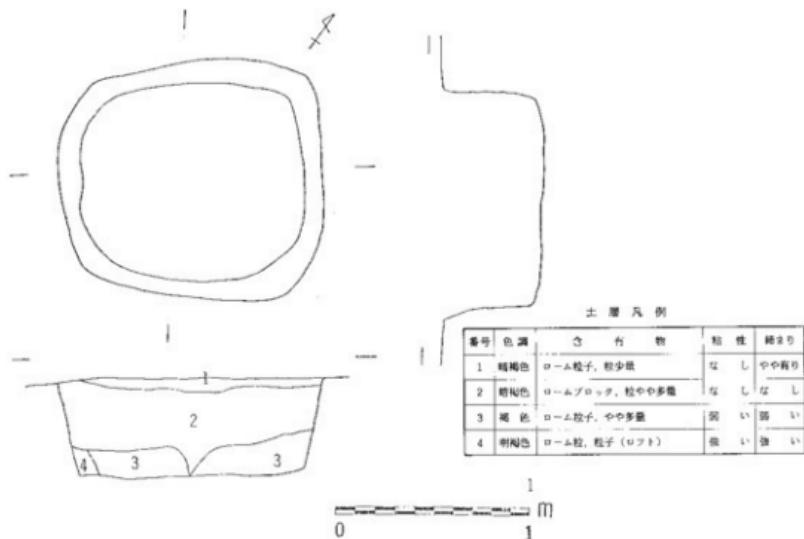
本跡は、旧道を掘り込み営まれていた。長辺1.73m×短辺1.2mの方形形状プランを呈していた。深さは50cmほどを測り底部はほぼ水平に移行、状態は良い、壁面はやや開き鋭角的に立ち上がる。

覆土は、4層に分類されたがいずれもロームブロック、粒子、粒の混入の差である。

遺物は2点のみで縄文土器であった。時期を決定する資料は無い。



第16図 20・21号土坑実測図



第17図 23号土坑実測図

3. 溝・道路

第1号溝（第18図）

本跡は、調査区の西端、1. 2号土坑に掘り込まれ大半をエリア外に置きその全容を把握出来なかった。確認された範囲では方形状形態を有すると推察される。掘り込みは弱い〔U〕字状を呈し底面は凹凸が激しく締まりは弱い。

覆土は2層に分けられ明褐色、暗褐色を呈し粘性、締まりはやや有り覆土からはやや古い時期と推察される。

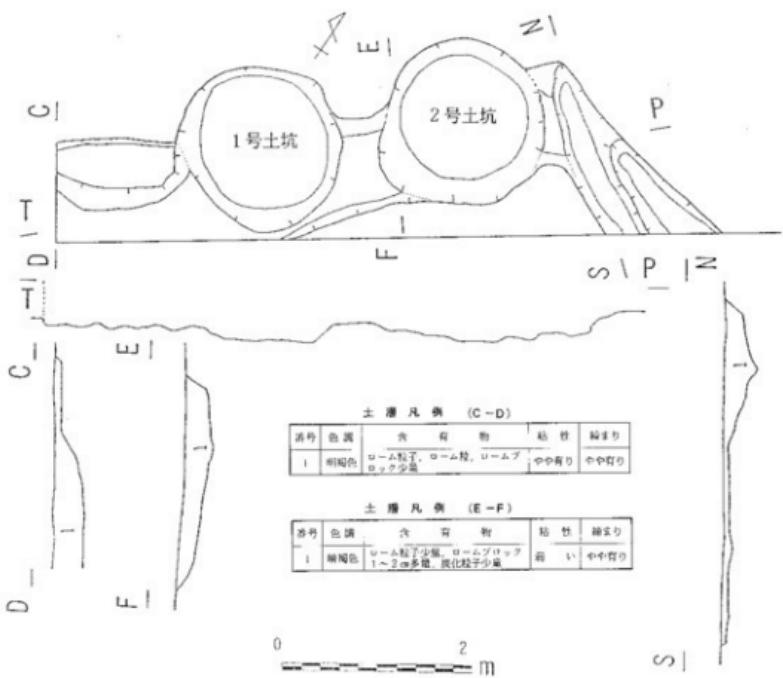
遺物は雲母片岩が1点底部から検出されたのみで有った。

第1号道路状遺構（第19図）

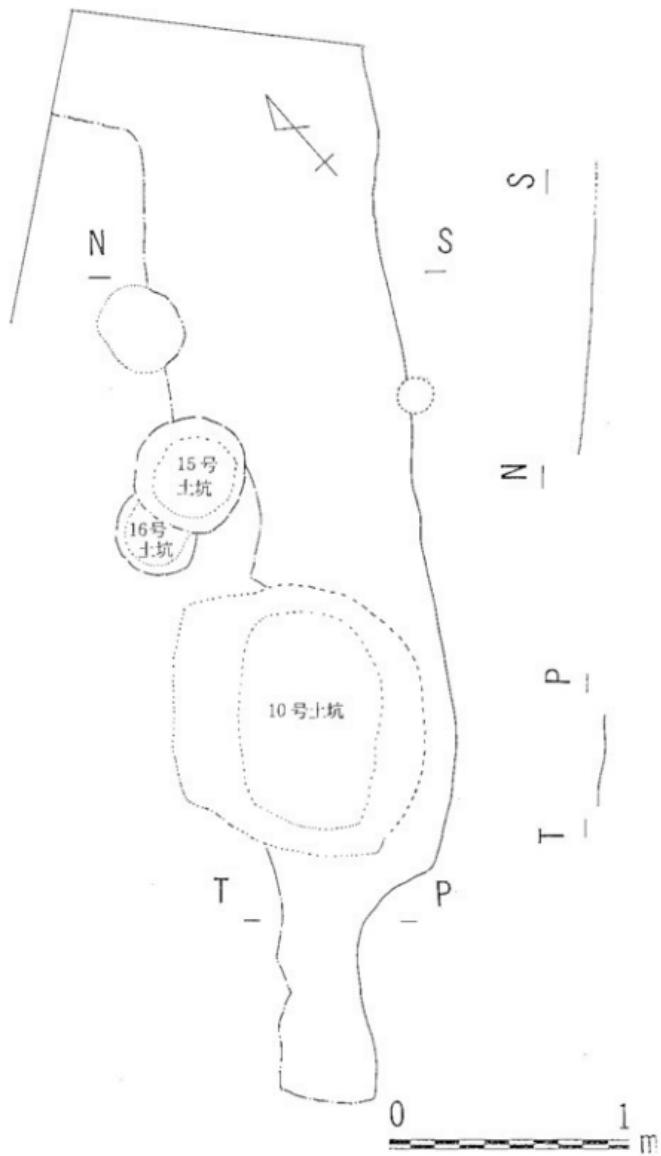
本跡は、調査区の北端部から南側へ向かって長さ9.7m、最大幅2.7mで表土を除去した時点で一部検出された。当所は住居跡の床面とも考えられたがプラン確認を進めたところ前述の規模を呈するに至った。底面はかなり良く締まり北側に僅かに傾斜を示していたが明確に『道』とする根拠は無かった。

覆土は前述の様に確認時点に存在しない。遺物は認められなかった。

本跡の中には芋穴2、土坑3、木根痕1が掘り込まれ検出されている。中央部下位には1号住居跡が存在していた。以上の点から本遺構の年代はかなり絞る事ができる。



第18図 1号溝実測図



第19図 道路状遺構

4. 土坑・表採出土遺物

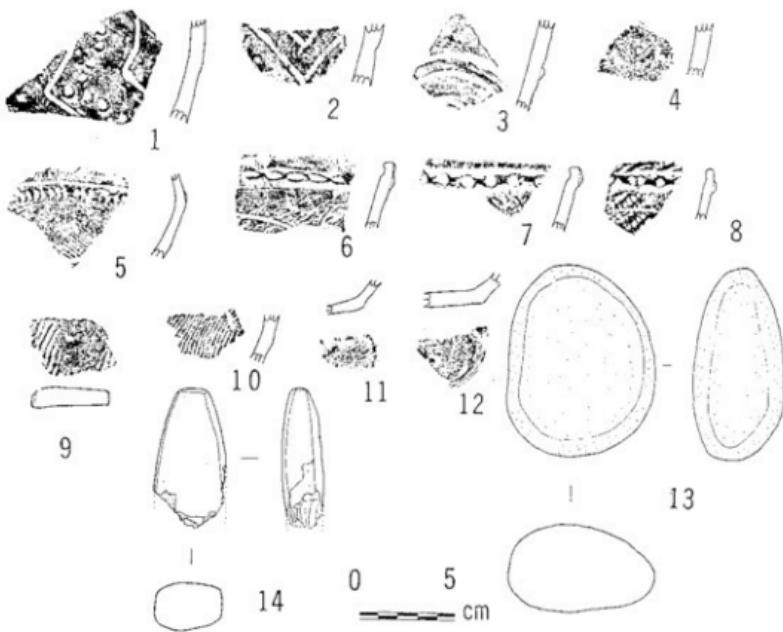
土坑からは総数442片、調査前の表面採集で150片、遺構確認時で35片の計627点検出されたが其の内80点は1cm～5cmの河原石でありその他瓦、ガラス玉、アカニシ、プラスチックなどが有り土器はいずれも細片、磨耗が進み時期を判別するのに困難なものが多かった。

1は磨消部に沈線区画し棒状工具による刺突を加える。2は菱形の区画がなされ1同様棒状工具に依る刺突が施される。共に器肉はやや厚口、後期初頭称名寺式に位置づけられる深鉢形土器。3は磨消部に隆帯を円形に二重に貼付、堀之内式?。4は5本単位の櫛状工具による円形文を施す加曾利E式?。5は胴部で屈曲浅鉢形か、磨消部の沈線間に刻み目を連続的に施す加曾利B式。6.7は隆帯に連続的に押圧を加える、8はやや間隔があく内側には幅のやや広めの沈線が巡る。地文には無節L、R L、L Rが見られる。

9は土器片鏡で重さ15gを計る。10は弥生式土器胴部と推察される。

11.12は底部回転糸切りでロクロ水引きの土師器坏?淡い橙色を呈し焼成は良い。12は12号土坑出土、国分式か。

13.14は石器、13は石斧楕円形状あまり使用痕は認められない、砂岩。4号土坑出土。14は磨製石斧で刃部を欠失している。側面共良く加工磨かれており蛤刃状を呈すると思われる。緑泥岩。



第20図 土抗表探出土遺物、括影図、実測図

第1号道路

本跡は、現在も道路として利用されている農道の下部60cm～70cmにおいて認められた層、面で砂、瓦、河原石、プラスチック等が検出され芋穴もかなりの数が認められた。一部では良好な緒まりを持つが一部では砂を盛った様な状態も認められ調査区の中では最大幅2m程で有った。

本道は明治年間に作成された字切り図から復元を試みると東側に位置する大麻神社の参道として形成、存在していた事が読み取れ、調査中多くの松の木の根を掘り取った穴が認められた事もこれらを裏付けるものであろう。そしてこの道が『馬場』として利用されていたことも事実と理解され現在の県道が建設されるまでこの道が麻生から北浦側への重要な往還としての機能を果し

ていたと理解されこの部分が地形状さも高い地区と考えられる。付近には東光寺、坂の下、大宮などの地名が残る。



第21図 明治年間の字切り図

IV 総括

調査は既に述べたように『大麻貝塚』の極一部、中心部を離れた部分であった。従って本遺跡の性格等を把握出来る程の遺構、遺物も検出されなかった。以下検出された遺構の時期的な問題を述べてみたい。

住居跡は、一応3軒としたが3号住居跡は断定は出来ない。1号住居跡は土坑に因って大半を掘り込まれ遺存部は極一部2割前後であった。遺物と確認されたものは加曾利B式の粗製の鉢形土器の1片のみであった。これから時期を決定することは無法に近いが一応縄文時代後期の遺構としておきたい。プランは楕円形状。2号住居跡は方形プランで遺物の大半は縄文式土器であったが床面からは土師器が検出された。古墳時代後半鬼高式1式の範囲に捉えられる肩部に棱を持つものであったが竈、炉、柱穴は検出されない遺構であった。その他石製の半孔の遺物が見られ石笛？不明なものが出土し、本跡の性格が単純な住居跡では無いと理解される。

土坑は、総数20基検出された。プランは円形を呈するもの6基、楕円形を呈するもの10基、方形、長方形を呈するもの4基で18号土坑が古墳時代後半鬼高1式の時期と推定されるほかは何れも中世～近世にかけて営まれたと考えられる。これらの覆土は何れも締まりは弱く粘性も12号土坑を除いて弱い、何れも人為的な埋積状態を示している。中でも10、15、16、21、23号土坑は江戸時代以降の年代が推定される。6、7、13、14号土坑は遺物の明確なものは無いが墓壇の可能性も考えられる。時期は前者よりはやや古くなると推察する。12号土坑は円形プランで粘土を覆土、にもち床面から検出された上坑で回転糸切りの环状土器が出土している。やや古く成るか。10号土坑はガラス玉、陶器から新しくなり明治以降の可能性が強い。

1号溝は、覆土遺物から古墳時代の遺構と考えられる。1号道路状遺構は土坑との切り合い等から古墳時代以前と考えられる。

道路は、字切り図から明治年間はかなり広く、そして約70cm～80cm程度がっていたことが読み取れる。調査の結果それは平瓦、プラスチックが出土し明確に確認された。

この道が大麻神社の馬場とし、また往還として古代から利用されていたことが地元の伝承としても残されていることからも窺える。

最後に大麻貝塚の一部と言え調査を行ったことから出土した遺物から遺跡の一端をかいまたような気がする。今回の調査で出土した土器は縄文時代後期初頭の称名寺式から堀之内式、加曾利B式、安行式までの形式を含み弥生式土器をも出土する遺跡である事が判明した。そして近世まで多くの遺構が存在している。それは大麻神社との関係と考えられる。

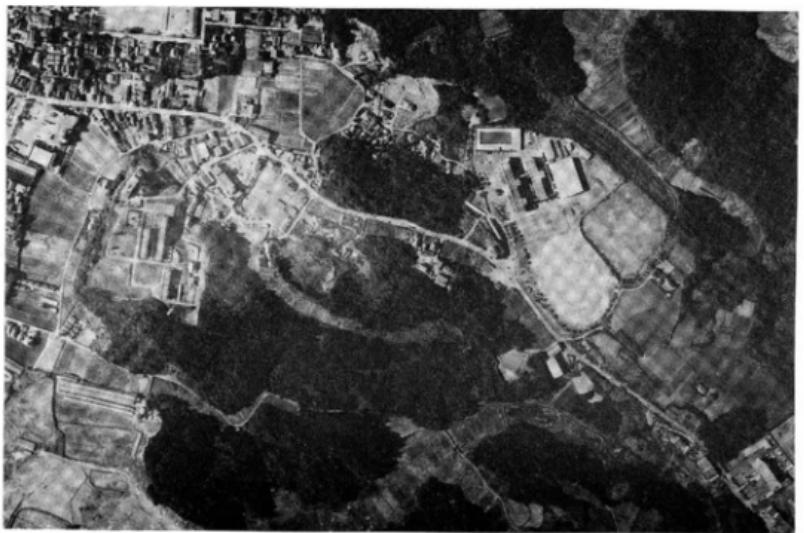
参 考 文 献

1. 日本貝塚地名表 昭和6年 酒詰仲男著によれば大宮台貝塚、異称麻生貝塚
1. 麻生の文化 第14号 昭和57年 麻生町の神社について
篠原龍雄
1. 古代 第63, 65号 昭和52,54年 称名寺式土器論
柳沢清一
1. 沼尾原遺跡 1980年 沼尾原遺跡調査会
1. 神野遺跡 1976年 神野遺跡調査会
1. 龍ヶ崎ニュータウン 南三島遺跡3.4区 昭和62年 茨城県教育財団

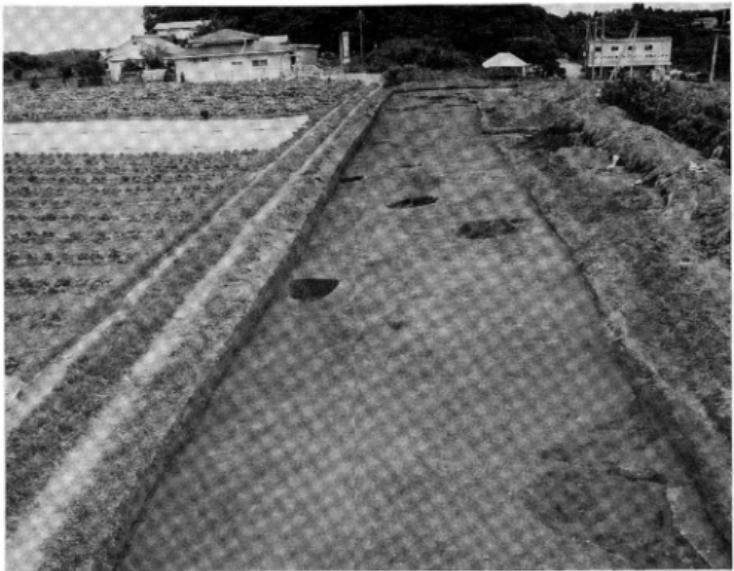
写 真 図 版



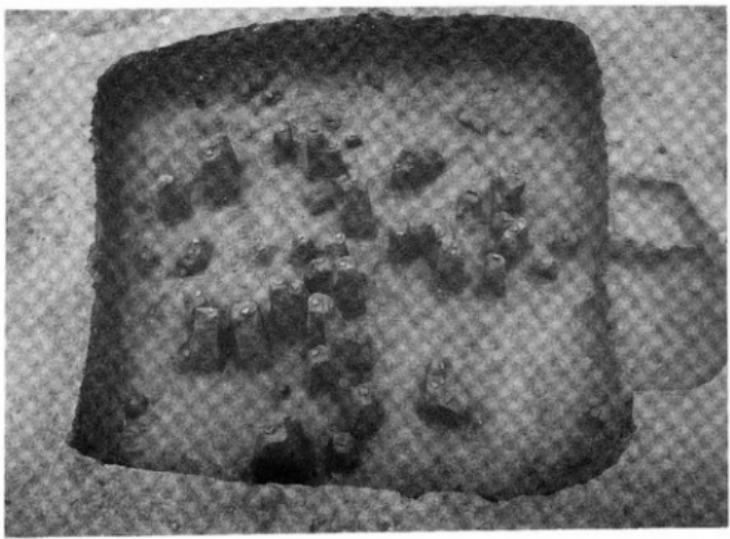
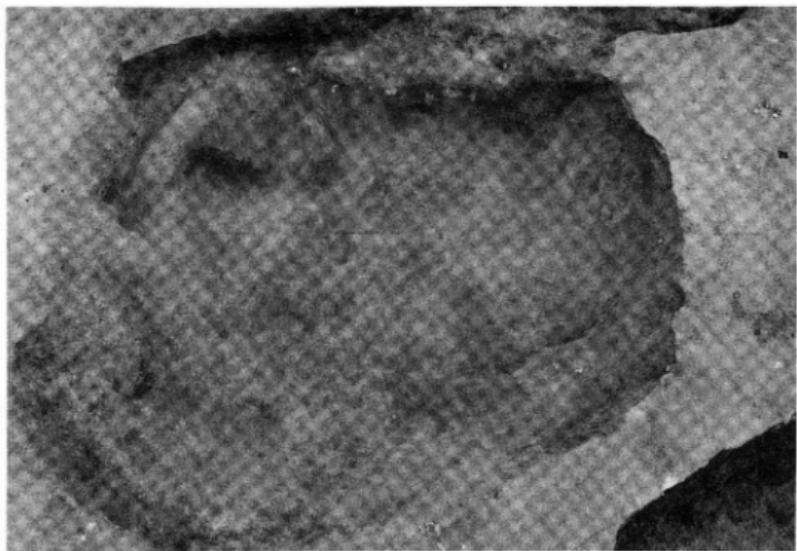
P L 1 調査前の風景 高校側から(上)、東北側から(下)



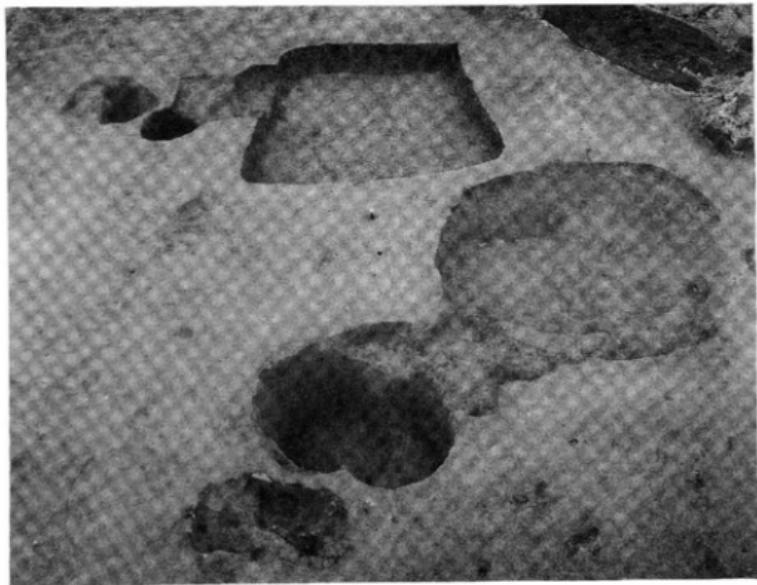
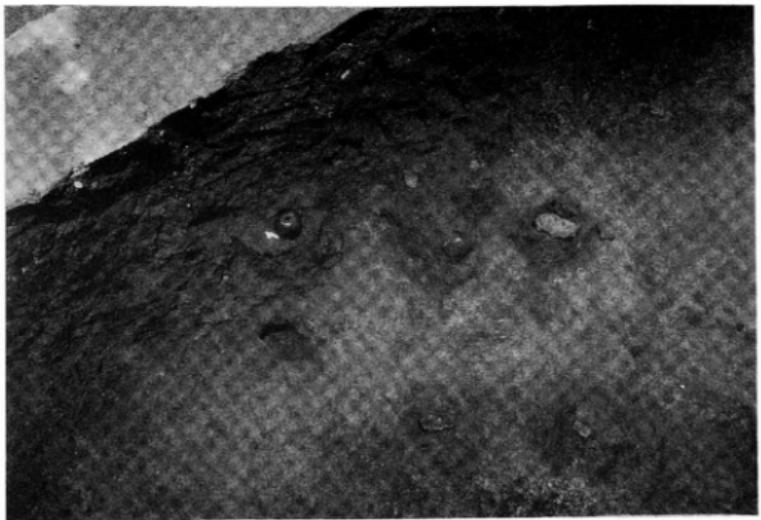
P L 2 上空から見た大麻貝塚(上)、大麻貝塚と陣屋跡(下左上)



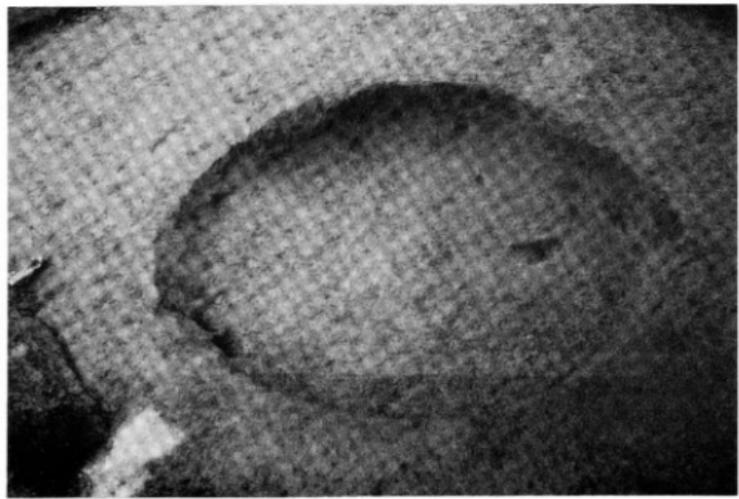
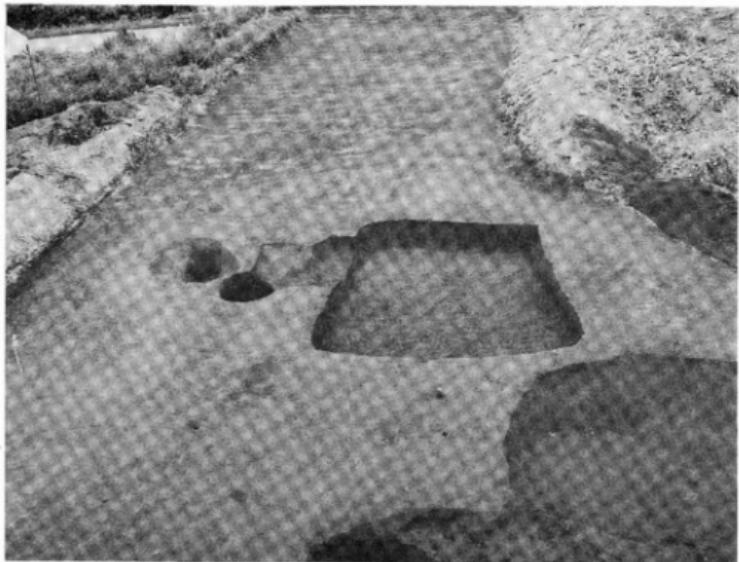
P L 3 調査終了後西側から(上)、調査終了後東側から(下)



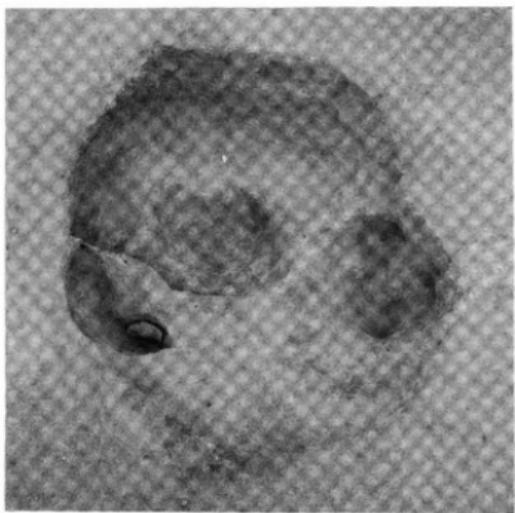
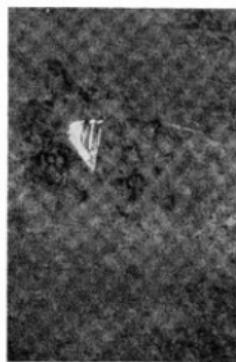
P L 4 1号住居跡完掘(上)、2号住遺物出土状態(下)



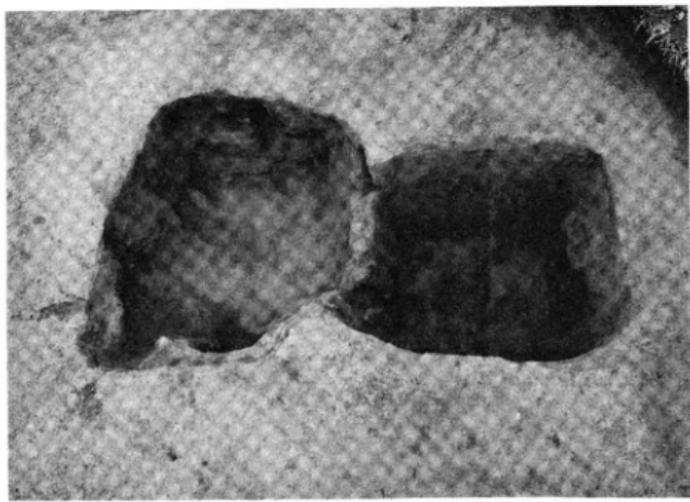
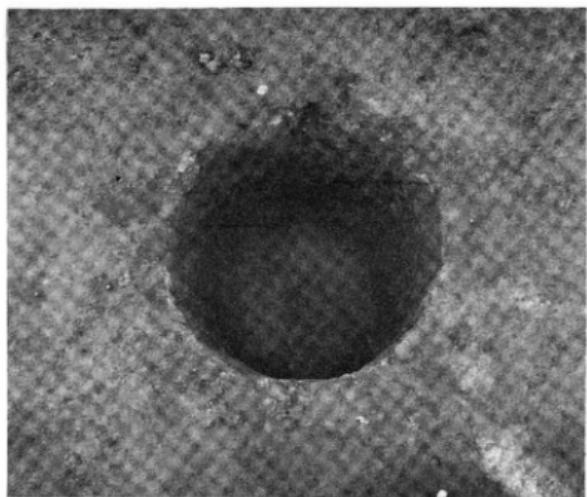
P L 5 2号住、玉、出土状態(上)、2号住完掘 北側から(下)



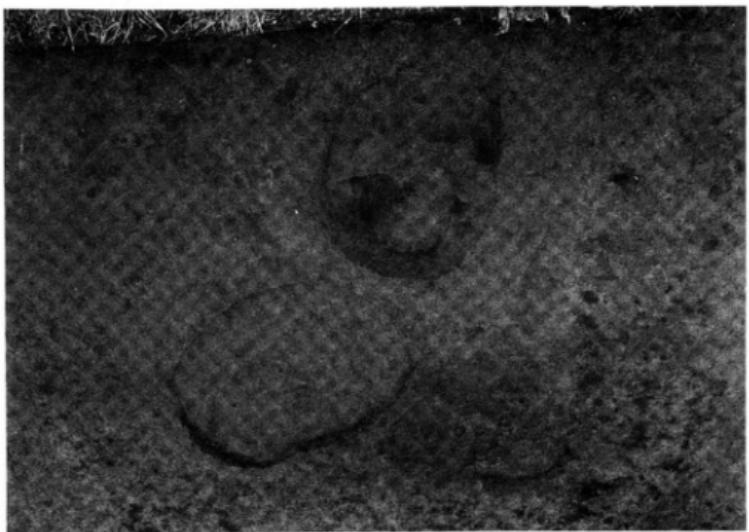
P L 6 2号住完掘と県道(左上端)(上)、1号土坑完掘(下)



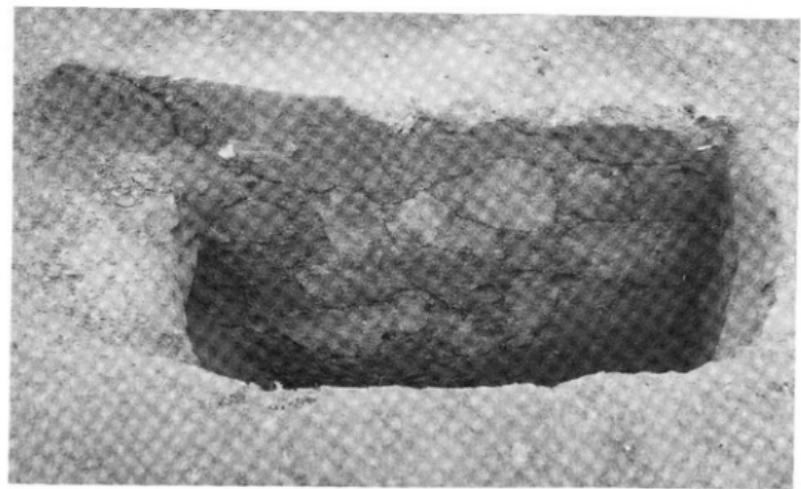
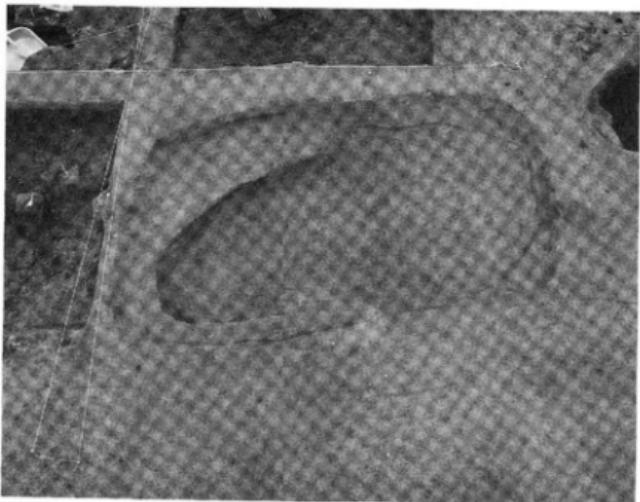
P L 7 2号土坑完掘(上)、4号土坑完掘(右)、出土遗物(左)



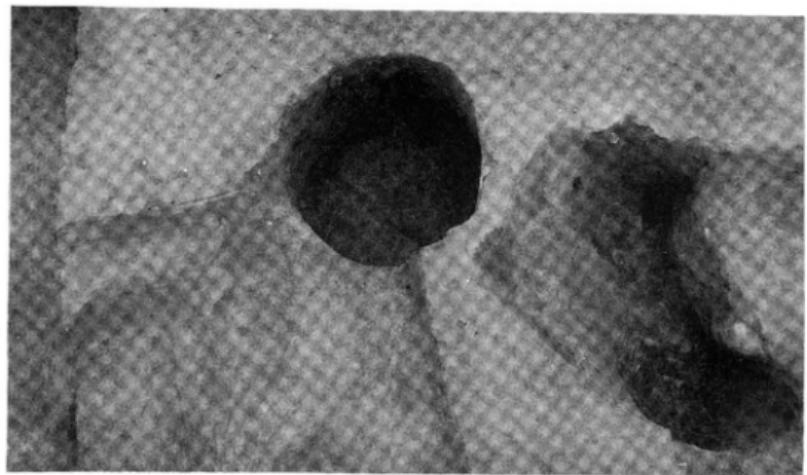
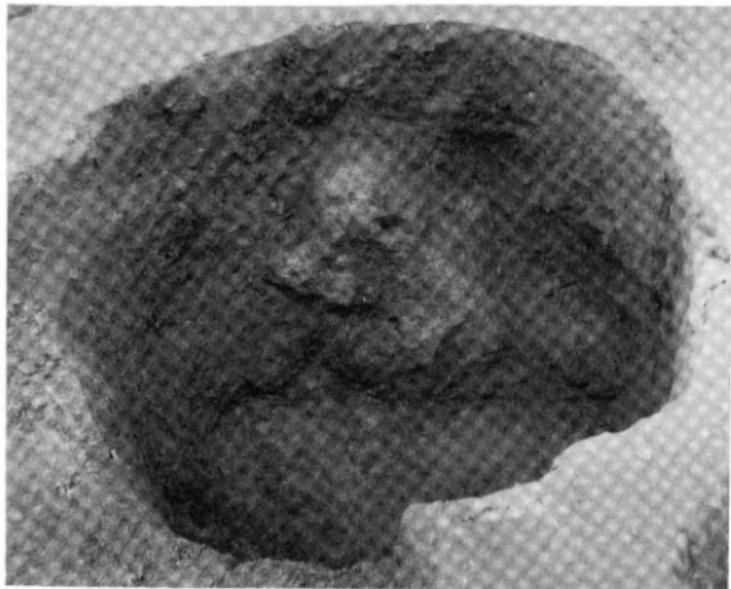
P L 8 5号土坑完掘〔上〕、6、7号土坑完掘〔下〕



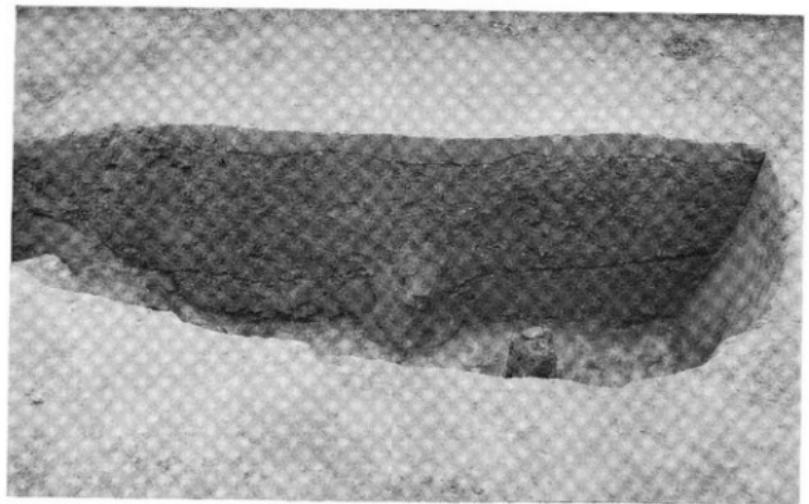
P L 9 8、9号土坑完掘(上)、10号土坑遺物出土状態(下)



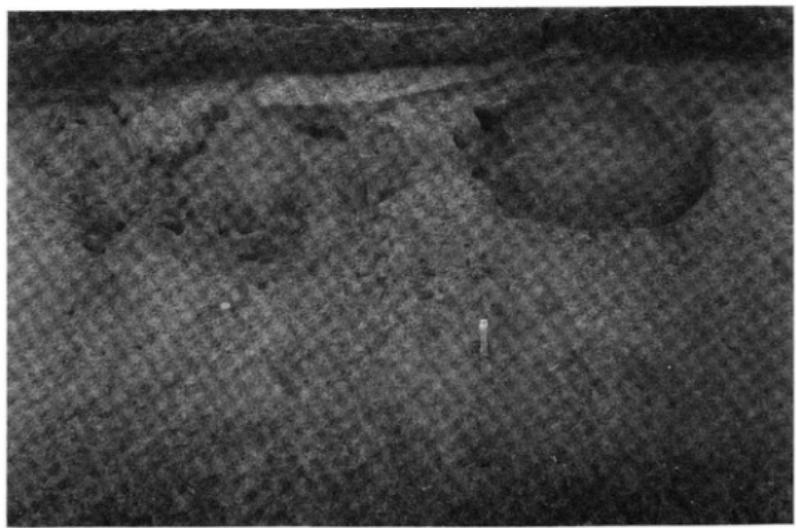
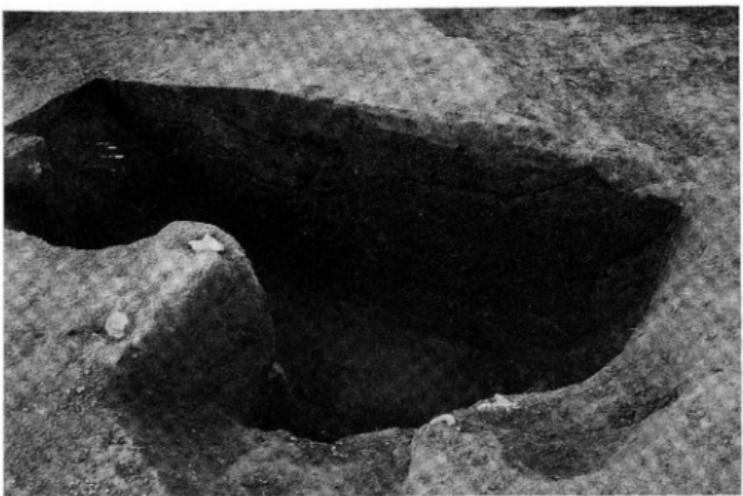
P L 10 11号土坑完掘(上)、12号土坑土层(下)



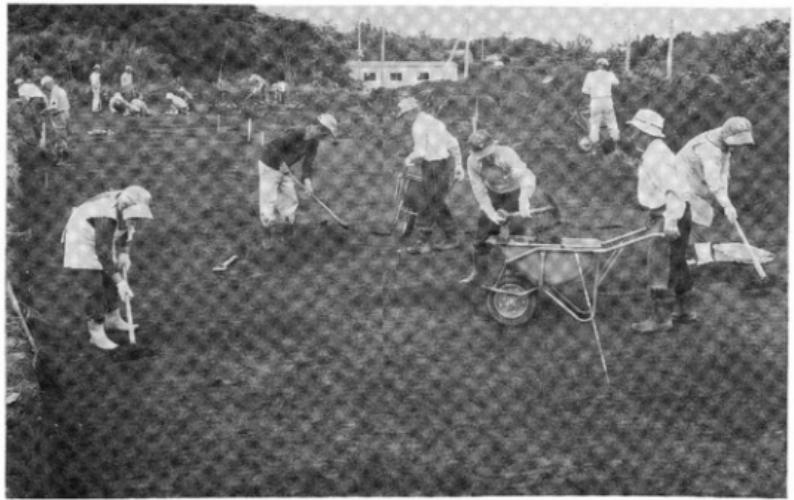
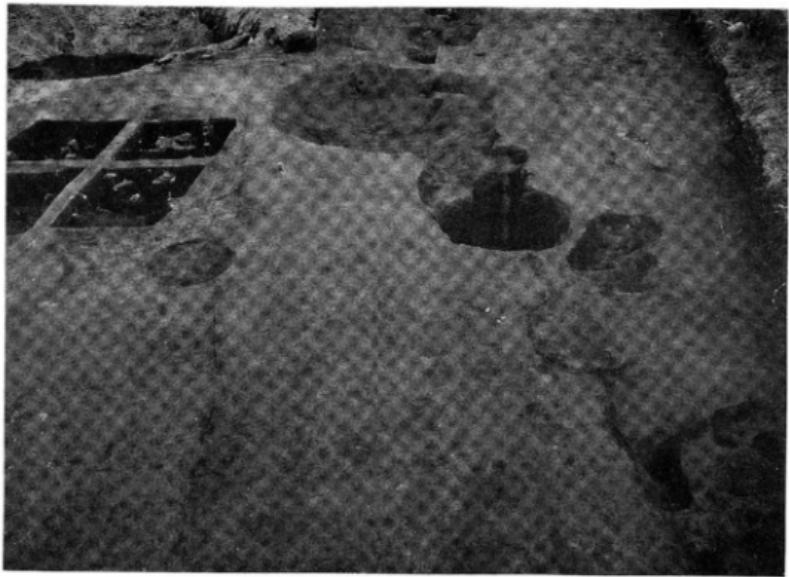
P L 11 12号土坑 (上)、12号坑完掘



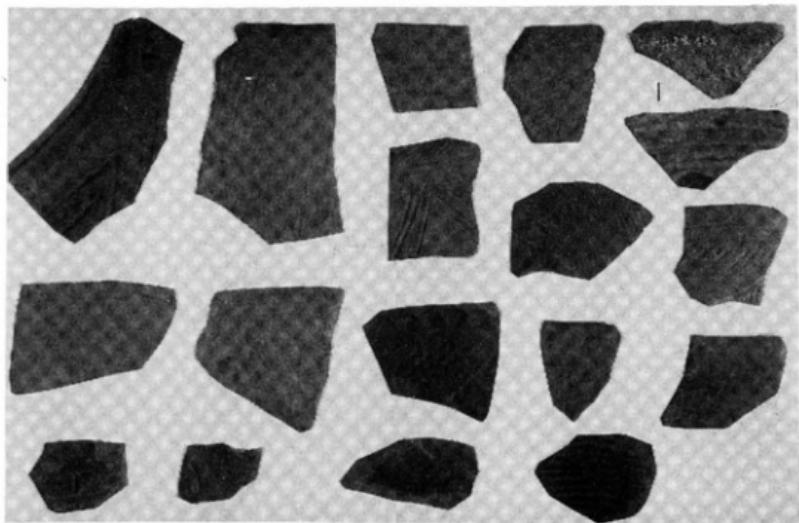
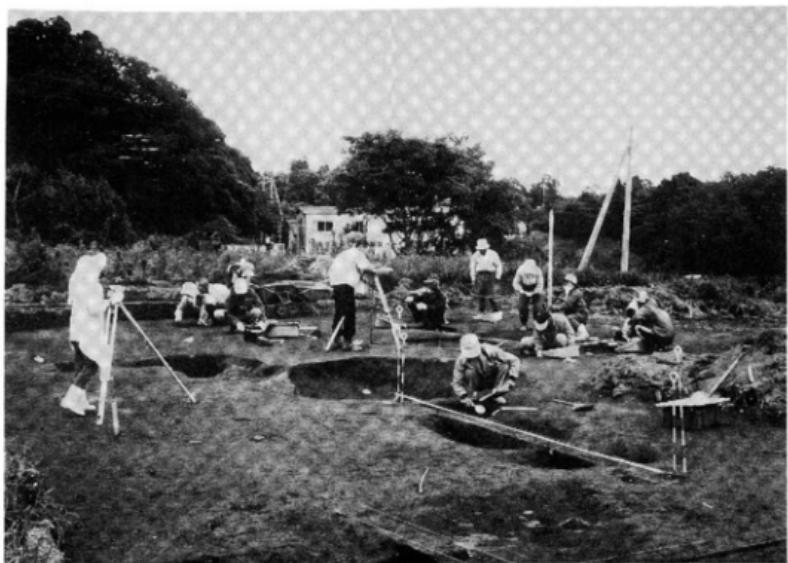
P L 12 15、16号土坑完掘(上)、23号土坑土层(下)



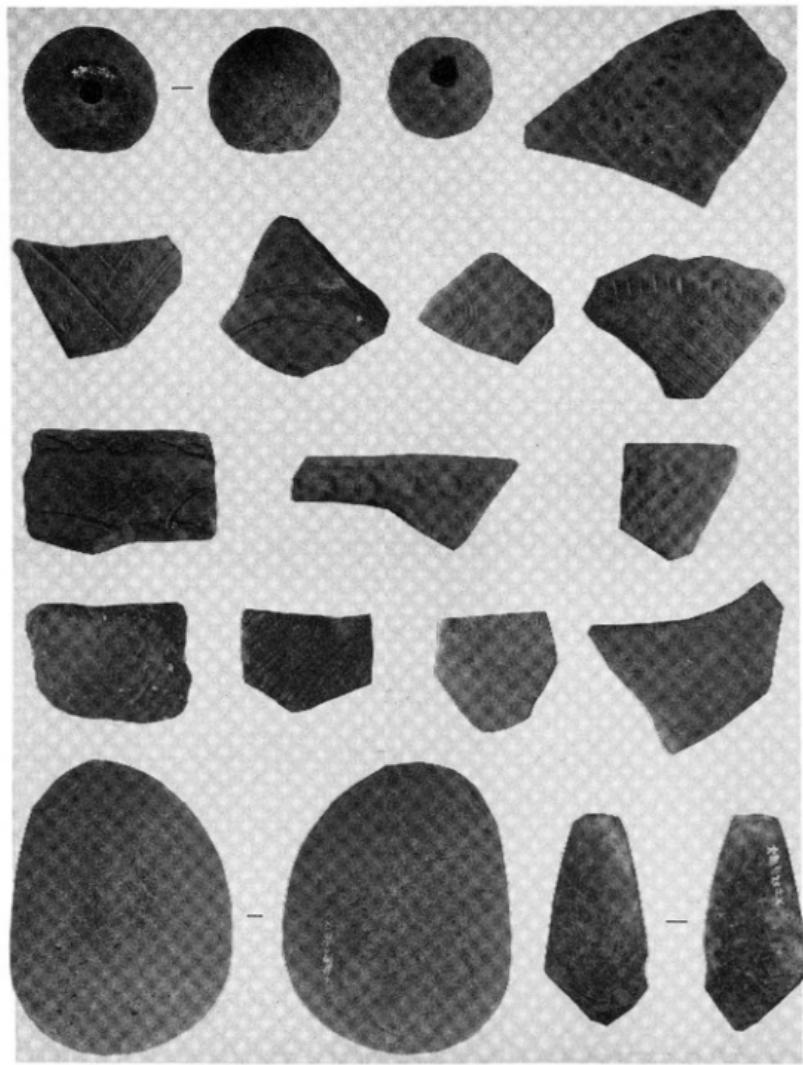
P L 13 21号土坑土層(上)、18、19号土坑完掘(下)



P L 14 1号道路状遺構 中央部 (上)、調査風景 (下)



P L 15 調査風景(上)、2号住出土遺物(下)



P L 16 玉類 2号住、他はすべて表採、土坑出土

大麻貝塚発掘調査報告書

平成2年2月15日 印刷

平成2年2月28日 発行

編集発行 大麻貝塚発掘調査会
茨城県行方郡麻生町麻生1561-9

印刷所 久保田印刷 麻生町四鹿963
